新井下遺跡

――新中村配水池建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書――

2013.3

茅野市教育委員会

ARAISHITA SITE

新井下遺跡

——新中村配水池建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

2013.3

茅野市教育委員会

序　文

茅野市は長野県南東部に位置する風光明媚な高原都市です。東に八ヶ岳連峰、西に赤石山脈から続く守屋山塊、北に霧ヶ峰山塊を擁し、霧ヶ峰の南麓からは遠く富士山を望むこともできます。

茅野市には特別史跡尖石遺跡、国史跡上之段遺跡・駒形遺跡をはじめとする数多くの縄文時代の遺跡があり、「縄文の里」として全国にその名を知られています。ここに報告する新井下遺跡は縄文時代と平安時代の遺跡です。

本遺跡は重要文化財土偶（仮面の女神）が出土した中ッ原遺跡とともに、湖東地区を代表する遺跡として大正時代には知られていました。

本遺跡は昭和33年の北部中学校建設工事で消滅したと考えられていましたが、中学校の改築工事、湖東保育園の移転新築工事に伴う発掘調査で多くの遺構が発見され、周縁部ではかなり良好な状態で残っていることが確認されました。

この度、新中村配水池の建設工事に伴い、遺跡の周縁部と考えられる台地の南側を発掘調査することとなりました。

その結果、数は少ないものの、縄文時代の竪穴住居址２軒、平安時代の竪穴住居址１軒などが発見され、縄文集落および平安集落の広がりと構造に関わる新たな知見が得られました。さらに、遺跡の範囲をより正確に括るための資料を得ることもできました。

その調査成果をまとめたのが本報告書です。本書が考古学、さらに地域研究の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご理解とご協力いただいた地域の皆さん、調査に参加された皆さまに厚くお礼を申し上げる次第であります。

平成25年３月

茅野市教育委員会

教育長　牛　山　英　彦

例　　言

1　本書は平成23・24年度に実施した新中村配水池建築工事に伴う長野県茅野市湖東（新井）5446－１番地所在の新井下遺跡発掘調査報告書である。

2　本調査は茅野市水道課の委託を受け、茅野市教育委員会が実施した。

3　発掘調査は以下の期間に実施した。

試 掘 調 査　平成23年８月１日～２日

本　調　査　平成23年８月23日～10月24日

整理作業および報告書作成　平成24年４年２日～平成25年３月15日

4　本調査における委託業務は以下の業者に委託した。

基準点測量　株式会社両角測量

5　発掘調査に係わる出土品、諸記録は茅野市尖石縄文考古館で収蔵・保管している。

6　発掘調査は茅野市教育委員会事務局尖石縄文考古館および文化財課が実施した。調査体制は以下のとおりである。

①　調査主体者　牛山　英彦（教育長）

②　事　務　局　小池　沖麿（生涯学習部長）

③　尖石縄文考古館（平成23年度）

鵜 飼 幸 雄（尖石縄文考古館長）　五 味　　仁　（考古館係長　平成23年９月30日まで）

功 刀　　司（考古館係長　平成23年10月１日から）　守 矢 昌 文（文化財係長）

柳 川 英 司　　山 科　　哲　　大月三千代　　小 池 岳 史

文化財課（平成24年度）

鵜 飼 幸 雄（文化財課長）　中 村 浩 明（考古館係長　平成24年４月１日から）

小 林 深 志（文化財係長　平成24年４月１日から）　功 刀　　司　　山 科　　哲

大月三千代　　小 池 岳 史

④　調査担当　小 池 岳 史（発掘調査・整理作業・報告書担当）

⑤　発掘調査・整理作業参加者

補　助　員　牛 山 矩 子　　武居八千代

作　業　員　阿 部 邦 夫　　宮 坂　　功　　柳 沢 省 一　　五 味 出 雲　　酒井みさを

大 勝 弘 子　　立岩貴江子

凡　　例

1　遺構の縮尺は１／80、遺物の縮尺は１／４とした。

2　挿図における遺構の略号は以下のとおりである。

①　１号住居址 → １住　②　１号土坑 → １土　③　１号溝址 → １溝

3　本書における土層の色調は『標準土色帳』を参照した。

目　次

序……茅野市教育委員会教育長　牛山　英彦
例言
凡例

第１章　調査の経過……1
　第１節　調査にいたる経緯……1
　第２節　発掘調査の方法……2
　第３節　発掘調査の経過（抄）……2
第２章　遺跡の位置と環境……3
　第１節　茅野市の地形の概要……3
　第２節　新井下遺跡の位置と地理的・歴史的環境……4
　第３節　遺跡調査の歴史……5
　第４節　基本層序……7
第３章　検出された遺構と遺物……10
　第１節　遺構と遺物の概要……10
　第２節　縄文時代の遺構と遺物……10
　第３節　平安時代の遺構と遺物……18
　第４節　その他の時代の遺構と遺物……19
第４章　発掘調査の総括……20
　第１節　縄文時代の集落について……20
　第２節　平安時代の集落について……21
写真図版
抄録

第１章　調査の経過

第１節　調査にいたる経緯

新井下遺跡のある湖東地区は茅野市のほぼ中央に位置し、東に八ヶ岳連峰、北に霧ヶ峰山塊、西に赤石山脈北端の守屋山塊が望める眺望のきく場所である。また保育園、小中学校、地区コミュニティセンターといった福祉、教育、行政の各施設が一定範囲に所在するほか、ＪＲ中央東線茅野駅まで約７㎞、中央自動車道諏訪インターチェンジおよび諏訪南インターチェンジまで約８㎞の位置にあり、佐久・上田方面へ通じる国道152・299号が地区内を横断している。このような住環境に恵まれた湖東地区は、市域の中で農地の宅地化による居住区域の拡大が著しい地区の一つであり、今後もいっそうの進行が予想されている。

茅野市水道課では、こうした住環境の変化に対応できる容量を備えた配水池を設置し、安定した上水を供給するため、昭和37年に建設された「中村配水池」に替わる「新中村配水池」を移転新設することとなった。その場所に選定されたのが、新井下遺跡内にある旧湖東保育園の跡地である。

建設地となる旧湖東保育園の跡地は、遺跡のある東西に伸びる台地の南側、遺跡範囲の南端に位置している。小地形でいえば、馬の背状の高まりの先端部付近であり、西から入る浅く小さな谷を挟み、現湖東保育園と北部中学校のある台地平坦面を見下ろすことができる。

平成５年に建設地の西側隣接地で市道改良工事に伴う発掘調査が行われ、調査区全域から縄文・平安・中世の遺構・遺物が検出されている。その中に建設地に沿った市道にかかる遺構もあり、これらの遺構が建設地はもとより、その東側にある工場にかけて広がる可能性が指摘されていた。

配水池の建設に伴う基礎工事は現地表面から約2.5ｍの掘削が計画され、多少の設計変更があったとしても、工事による遺跡の破壊は避けられない状態であった。西側隣接地の調査結果を見る限り、遺構の密度は薄いことが予想された。その上、遺構が存在したとしても、旧保育園の造成と建築時の建物基礎などの掘削によって、その大半は削り取られてしまったものと考えられた。このような地下の状態が推測されたが、遺構の有無および遺存状態を確認し、本調査を行う必要があるかを判断する目的で、建設地全域約1,300㎡を対象に、国庫補助事業「市内遺跡発掘調査等事業」による試掘調査を平成23年の８月上旬に行うこととした。

建設地全域を覆うように、幅１ｍ、長さ９～35ｍの試掘溝を南北方向に８箇所（１区～８区）設定し（第５図）、0.11㎥級のバックホウで表土層を剥ぎ取った後、人力による遺構検出作業を行った。その結果、北側を除く建設地の約３/４にあたる範囲は、旧保育園建設工事に伴う掘削が明黄褐色土層（ローム層）に達し、東端部では基盤に入る礫の露出がみられるなど、土層が著しく乱された様子が確認された。このような状態にも関わらず、縄文時代と考えられる柱穴状の落ち込みが点々と検出されていった。一方、地形の低い北側は埋土により造成が行われたために、北端部に造成前の耕作土層が残されているなど、土層が良い状態で保たれていた。ここにつくられた縄文時代の土坑（10号土坑）や平安時代の住居址（１号住居址）は、耕作土層直下の黒褐色土層面で確認することができている。

このように遺構の遺存状態に良し悪しはあるものの、建設地のほぼ全域から遺構が確認された。このため約900㎡を対象とする本調査を行うこととなった。本調査は８月下旬から開始し、10月下旬に終了した。最終的な調査面積は927㎡である。

第２節　発掘調査の方法

（１）遺跡名について

新井下遺跡は、昭和36年発行『湖東村史 上』（1961）と昭和43年発行の『諏訪史蹟要項24　茅野市湖東篇』（1968）によれば南原遺跡とされている。しかし調査区の小字名は「新井下」であり、大正13年発行の『諏訪史』第一巻（1924）、昭和33年の宮坂英弐氏の日記（1958）、昭和61年の『茅野市史』上巻（1986）、平成18年度版の『茅野市遺跡分布図』（2006）等でも新井下遺跡としてあるため、本報告書においてもこの遺跡名を使用した。

（２）表土の掘削と遺構の検出

表土の剥ぎ取りは0.28㎥級のバックホウを用いた。調査範囲全域の表土を一度に除去する予定であったが、試算された土量が多量となり、調査範囲を除いた約400㎡の建設地内にこの土を集積することは不可能と考えられた。このため表土置場を確保するために、調査を北と南にわけて行うこととした。

調査区の東側・南側・西側の約３/４にあたる範囲は、旧保育園建設関連の工事によって明黄褐色土層面まで乱されていた。そのために、この面を遺構検出面とせざるを得なかった。一方、土層の保存状態の良い北側では、耕作土層直下の黒褐色土層面で遺構の確認が可能であった。この面で重機による掘削を止め、できる限り高い位置で遺構を検出するように努めた。

（３）写真と測量

現場での写真による記録は35㎜のカラー・白黒・リバーサルフィルムを使用し、補助用にデジタルカメラを使用した。

平面図・断面図等の基準となる測量杭は任意に打設した杭とし、世界測地系により座標化した。遺構の平面図および断面図の縮尺は１/20、遺構全体図は１/100で作成した。平面図は平板測量で作図した。

（４）整理作業

平成24年４月から断続的に行ったが、本格的な作業に着手したのは12月からである。これまでに当遺跡では数次の本調査および工事立会が行われ、それぞれ遺物が出土している。そこで遺物の注記については、既出の遺物と区別するため、遺跡登録番号の「59」、調査地点の地番の「5446－１」、遺構番号、調査年度（西暦）の下２桁となる「11」の順番で注記することとした。

第３節　発掘調査の経過（抄）

平成23年度

８月１日　試掘調査開始
８月２日　試掘調査終了
８月23日　北側調査区の本調査開始
　　表土剥ぎ取りと遺構検出作業
８月25日　遺構調査開始
９月６日　基準杭設置
９月16日　北側調査区の調査終了
９月22日　南側調査区の本調査開始
　　表土剥ぎ取りと遺構検出作業
９月23日　現場説明会開催（参加者約60名）
９月26日　遺構調査開始
10月11日　基準杭設置
10月24日　南側調査区の調査終了
　　表土埋め戻し

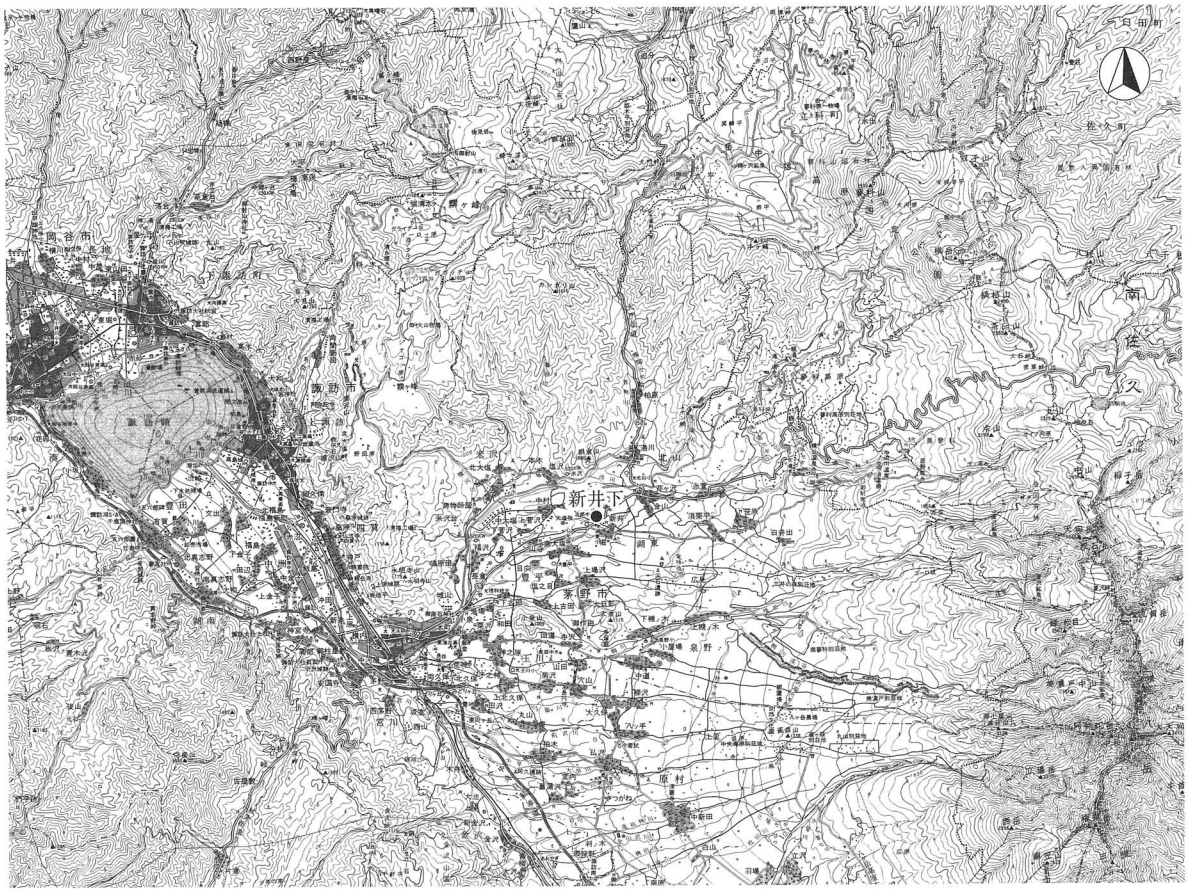
第２章　遺跡の位置と環境

第１節　茅野市の地形の概要

茅野市は長野県南東部の諏訪地域に位置する。諏訪地域の地勢は、北側が諏訪湖（759m）を中心とする「湖盆」と呼ばれる平地、南側が八ヶ岳火山列・霧ヶ峰山塊とその麓に発達した台地・扇状地・谷などからなる山地に大きく分けられる。この平地と山地に跨って、諏訪地域の南東部、265.88ｋ㎡を占めるのが茅野市域である（第１図）。

茅野市は、東を主峰赤岳（2,899m）に連なる2,000m台の山からなる八ヶ岳火山列、北を車山（1,925m）から西へ続く霧ヶ峰高原の山塊、西を赤石山脈の北端となる守屋山・入笠山塊（守屋山1,650m）に囲まれている。そのため市域の大部分は山地となる。三方を囲む山なみの麓には湧水や小河川による浸食・堆積作用で台地や扇状地が発達し、これらの高まりに点々と集落が営まれている。山麓を削った大量の土砂は、市内を流れる上川と宮川の二大河川によって諏訪湖方面へ運ばれ、市域の北西部に、湖盆に続く沖積段丘面および沖積低地を形成する。こうしてできた標高にして800m前後の平地一帯に現茅野市街地が広がっている。平成25年２月１日現在の人口は55,956人である。

以上に記した市域の地形は、守屋山・入笠山塊の東の裾を西縁とする糸魚川－静岡構造線の断層活動と、その後に生じた隆起や火山活動によって形成されたものである。約2,300万年前に始まったとされる糸魚川－静岡構造線の活動によって、東側の地域は広く大きく陥没した。この広大な落ち込みがフォッサ・マグナ



第１図　遺跡位置図（１/200,000）

（大地溝帯）と呼ばれている。ここに日本海と太平洋から海水が流入し、砂や泥が厚く覆うとともに海底火山に伴い噴出した岩石が堆積した。やがてこれらの堆積物が隆起し、守屋山が生まれることとなる。約250万年前になると、フォッサ・マグナの各地で火山活動がさかんとなり、約130万年前から約１万年前までに霧ヶ峰・車山山塊や八ヶ岳火山列が形成されていく。この過程の中で本州最大の黒曜石原産地が生成したとされる。これらの火山活動と並行して、約100万年前からフォッサ・マグナの西縁付近で断層活動が進行し、約30万年前に現在の諏訪盆地と諏訪湖が形成したといわれている。このように市域の地形は、糸魚川－静岡構造線の活動以降のさまざま大地の動きによって、長い時間をかけて形づくられたものである。

こうしてできた変化に富んだ地形が、豊かな山・川の幸を育み、また地形の形成過程において利器の材料に最適な黒曜石を身近な場所にもたらすこととなった。このような自然環境の備わった茅野市域は、縄文時代の人々が生活を営む上で最適な場所であった。これを裏づけるように、200箇所以上もの縄文時代の遺跡が八ヶ岳火山列や霧ヶ峰山塊の麓を中心に残されている。

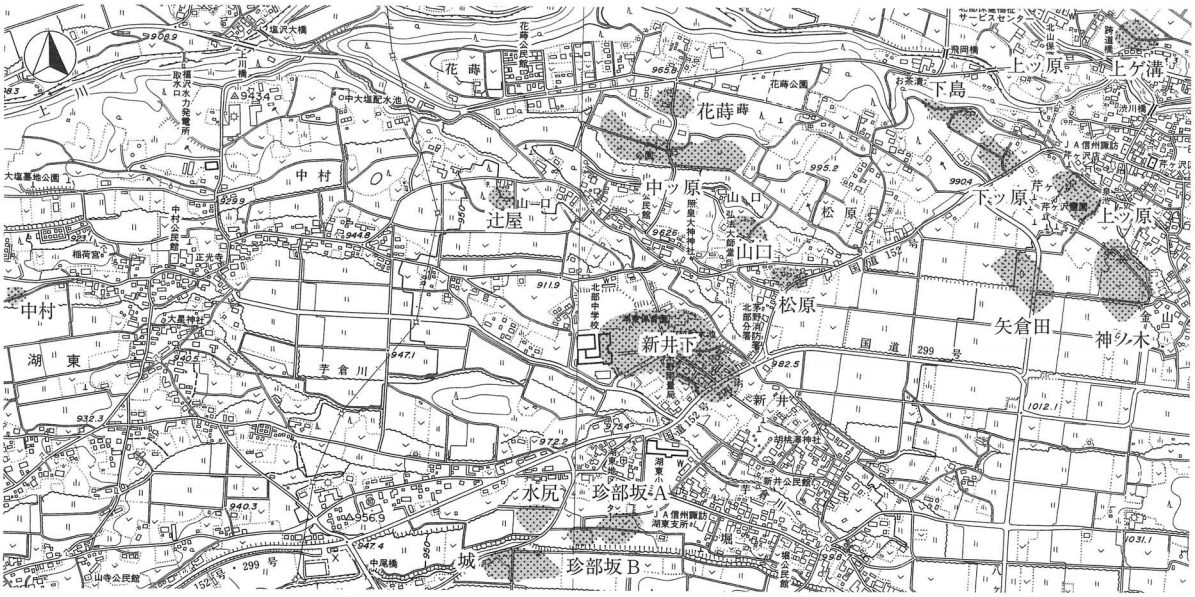
第２節　新井下遺跡の位置と地理的・歴史的環境

山地が市域の大半を占める茅野市において、その象徴的な景観といえば、八ヶ岳火山列の峰々から西に広がる広大な裾野であろう。この一帯は八ヶ岳火山列の火山活動による堆積物と、御嶽・乗鞍火山から噴出した降灰活動による風成堆積物を基盤とする地域で、西に傾いた緩やかな斜面を特徴とする。この斜面は八ヶ岳の山腹や標高1,100m付近から発する湧水の小河川によって、「必縦谷」と呼ばれる火山麓に特有の谷が刻まれ、東西に細長い幾筋もの台地が発達した。こうした台地上は日当たりや水はけがよい。そして眺望のきく土地でもある。やがて気候の温暖化とともに、多様な動植物を育む豊かな森が台地を覆うこととなる。台地を区切る谷は水場に利用されるだけでなく、集落（生活領域）の境界を示す重要な役割を果たしたともいわれている。

このように縄文人が生活を営む上で好適な環境が備わった八ヶ岳の西麓には、国特別史跡の尖石石器時代遺跡、重要文化財土偶（仮面の女神）が出土した中ッ原遺跡をはじめ、中期を主体とする集落遺跡が濃密に残されている。これが「縄文の里」と呼ばれる所以である。今回報告する新井下遺跡は「縄文の里」の中核となる集落遺跡の一つであるとともに、八ヶ岳西麓における平安時代の中核的な集落遺跡である。

新井下遺跡は茅野駅から北東に約７km、湖東地区新井に所在する。新井集落のある台地と地続きで、集落のはずれ（西端）にあることから新井下遺跡と呼ばれている。南東から北西に伸びる台地上に立地し、遺跡内での最大幅は南北約200mを測る。台地の平坦面から南・北斜面の上部にかけて、東西約400mの範囲に縄文土器、平安土師器、黒曜石などの遺物が散布する。ちょうど北部中学校を西端とし、国道152・299号付近を東端とする範囲が遺跡に指定されており、その面積は約50,000㎡である。遺跡内の標高は970～985mで、八ヶ岳西麓にある縄文時代の遺跡の中で中程の高さにある。田・畑が広がる南側の斜面は、芋倉川の谷へ向かい緩く傾斜する。一方、北側の斜面は汐の浸食や冬期の凍み上がりによる崩落が進み、10数mの切り立つ崖となっている。両小河川は水量が年間を通して安定しており、アマゴの泳ぐ姿を見ることもできる。かつて北側斜面に直交する小さな谷の根元から年間を通じて安定した清水が湧き出しており、灌漑用水の一部に使われていた。このように適当な広さの平坦面があり、水に恵まれたこの台地は、縄文時代や平安時代の人々が集落を営む上で恰好の場所であったと考えられる。

新井下遺跡から半径１kmの範囲には縄文時代を主体とする多くの遺跡が知られている。北に山口、中ッ原、花蒔、東に松原、南に城、水尻、珍部坂Ａ、珍部坂Ｂ、西に辻屋の大小の遺跡がある（第２図）。



第２図　新井下遺跡と周辺の縄文時代遺跡（１/20,000）

第３節　遺跡調査の歴史

新井下遺跡では、これまでに数次の発掘調査および工事立会が行われている。その結果、縄文時代と平安時代の集落遺跡であるとともに、中世の遺物散布地であることが明らかにされている。今回の調査では新たに近世以降の溝址が確認された。

ここでは遺構・遺物の中心となる縄文時代と平安時代について、これまでの調査の概要と関連する文献の記述をまとめてみる。

新井下遺跡の名が初めて文献に現れるのは、大正13年発行の『諏訪史』第一巻（1924）「諏訪郡先史時代遺物発見地名表」である。この中に「新井下」の名があり、「磨石斧・土玉・珠・石棒・土器・メンコ・浮子石」が採集され、龍谷文庫・田實文朗・鷹野原喜平の所在と記されている。このように古くからさまざまな種類の考古遺物が採集できる場所として知られていた。

当遺跡は200箇所以上ある当市の縄文時代遺跡の中で、早い時期に調査が行われている。最初の調査は昭和33年の北部中学校建設工事に伴うものである。この時の様子を当時の尖石考古館長であった宮坂英弐氏が湖東公民館から発行された『湖東村史 上』に報告しているので、その一部を紹介する。「亦、昭和33年８月、この地域一帯が茅野市北部統合中学校敷地に選定され、ブルトーザで整地した時、土器、石器類の遺物が多数出土したが工事中のこととてこれを学問的に調査することができなかった。」。そして、器形復元された３個体の縄文中期土器ほか蜜柑箱３箱分の土器破片、石棒、磨石斧、打石斧、球石、凹石、黒曜石円形石器が「漸く（一部省略）採集され尖石考古館に保管されている。」とある。十分に調査できなかったことがうかがえるが、遺跡の主な時期が縄文時代の中期後半で、この時期の大きな集落遺跡であることを示唆する成果が得られている。今もなお北部中学校には、この時に出土したと伝えられる「Ｘ字状把手付深鉢」が収蔵・展示されている。

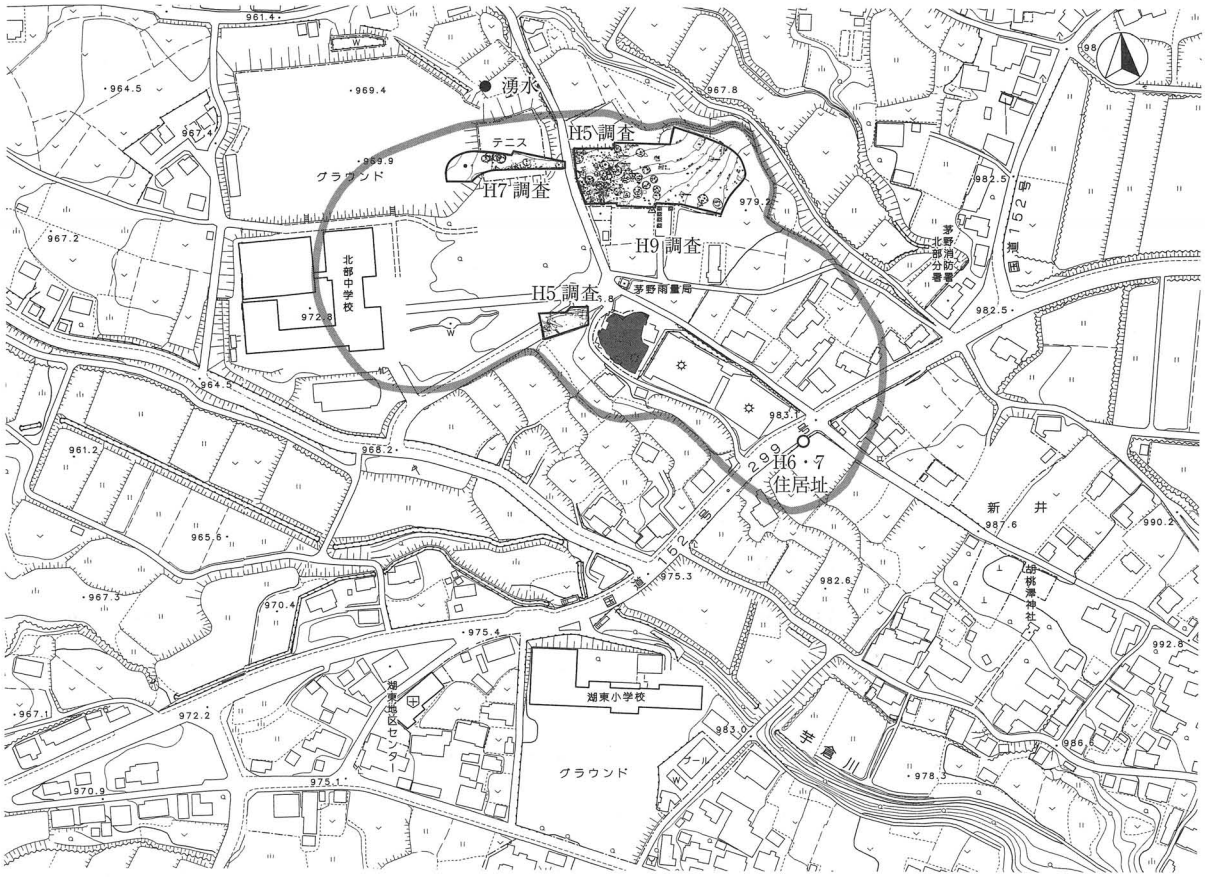
『茅野市史』上巻には、「北部中学校の建物により原地形の大半は失われたが、台地幅は200ｍと広く、かなりの規模の遺跡であったことがうかがわれる。」などと記されているに過ぎない。

本格的な発掘調査は、平成５年（1993）の湖東保育園の移転新築工事に伴う調査である。遺跡北側の台地平坦面、約4,000㎡が発掘され、縄文時代と平安時代の遺構・遺物が検出された。住居址の半数以上は、平

面形および出土土器から中期後半とされ、土坑の大半もこの時期につくられたものと考えられている。これらの遺構とともに、縄文時代前期前半（初頭）と中期前半（初頭）の住居址が各１軒、後期前半（前葉）の住居址が４軒、平安時代中頃の住居址が５軒検出されている。中期後半が当遺跡の主体となる時期とされた点に変わりはないが、縄文集落の形成が前期前半に遡ること、断続的ではあるが後期前半まで営まれた長期継続型の集落遺跡であることが明らかとなった。さらに中期後半の集落の形が環状ないし馬蹄形と考えられたほか、新たに平安時代の集落遺跡と確認されるなど、この調査によって遺跡の内容がおおよそ把握された。

同年に新湖東保育園の調査区から約80m南に離れた台地の南側斜面で、市道改良に伴う発掘調査が行われた。面積にして約400㎡の小規模な調査であったが、調査区全域から縄文・平安時代などの遺構・遺物が検出された。主体となる時期はやはり縄文時代と平安時代であり、この中に当遺跡で初見となる縄文時代中期中葉の住居址、平安時代の住居址と軸方向が一致する総柱の掘立柱建物址や柱穴列があり、縄文集落の継続性、平安集落または該期以降の集落に関わる新たな知見が得られた。その一方で、集落が遺跡の南側境界を超え、なお南へ広がる可能性が示されることとなり、遺跡範囲の括り方に課題が生じた。

昭和33年に建築された北部中学校が同じ敷地内で改築されることとなり、平成６年に遺構・遺物の遺存状態を確認する目的で、敷地の全域を対象に試掘調査が行われた。調査対象面積は約700㎡である。試掘調査では、昭和33年の造成で遺跡そのものが削平された箇所が確認される一方で、台地北側の縁辺部から縄文時代の住居址と遺物包含層が確認され、かなりの範囲に遺跡が残っている可能性が示唆された。この調査の結果は、造成計画にいかされ、多くの部分が盛土によって保存されることとなった。しかし台地北側の斜面の一部約900㎡をどうしても削平せねばならず、ここを対象に発掘調査を行うこととなった。



第３図　発掘調査位置図（１/5,000）

発掘調査は平成７年に行われた。平成５年の湖東保育園移転新築に伴う調査区の西に近接するため、関連する遺構の検出が予想されたが、そのとおり中期後半の住居址を中心に、後期前半の住居址（初頭の可能性がある住居址がある）、平安時代中頃の住居址など多くの遺構が検出された。調査範囲の東側に遺構・遺物が集中するのに対し、西側では後期前半の住居址と大形の土坑が１箇所ずつ確認されただけであった。こうした遺構・遺物の分布状態から、調査範囲の西側付近が当遺跡の北西端となる可能性が指摘されている。さらに中期後半の住居址群が環状ないし馬蹄形集落の北西部を形成すること、後期前半の住居址が北側斜面に偏在する傾向があること、平安時代の集落が広い範囲に営まれていることなどの所見を得ることができた。

平成９年には工場建設に伴う工事立会が、新湖東保育園の南側隣接地で行われている。ここは保育園建設時の調査結果からみて、遺構の埋蔵が確実視される場所であった。１ｍ角余りの独立基礎５箇所の掘削に立ち会った結果、中期前半（藤内Ⅰ式期）と中期後半（曽利Ⅳ式期）の土器片を含む黒色土層に掘削が及んだ。しかし狭い範囲であることも重なり、この面で遺構の有無は確認できなかった。

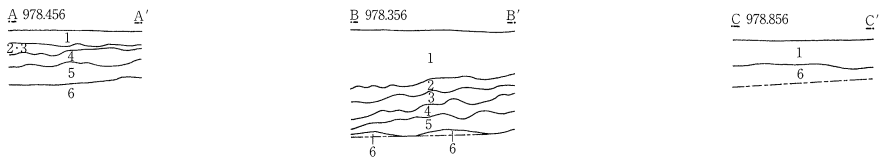
なお、平成６年または７年に、今回の調査地点から東に120ｍほど上った国道152・299号の切通し断面に、道路を拡幅する工事によって竪穴住居址が露出しているとの通報があり、市教育委員会の職員が現地を確認している。埋土からみて縄文時代の住居址と考えられるようであるが、その時の記録が見当たらないため、それ以上の詳しい内容は不明である。

これまでに行われた調査の結果から、当遺跡の特徴を以下にまとめておく。

1　八ヶ岳西麓における縄文時代と平安時代の中核的な集落遺跡と考えられる。
2　縄文時代の集落は前期前半から後期前半まで断続的に営まれるが、主体は中期後半である。
3　縄文時代中期後半の集落は環状ないし馬蹄形であると考えられる。
4　縄文時代後期前半の竪穴住居は北側斜面に偏在する。
5　平安時代の集落は中頃（10世紀後半から11世紀初頭）に限って営まれている。
6　平安時代の集落は竪穴住居・掘立柱建物・墓坑などから構成される。

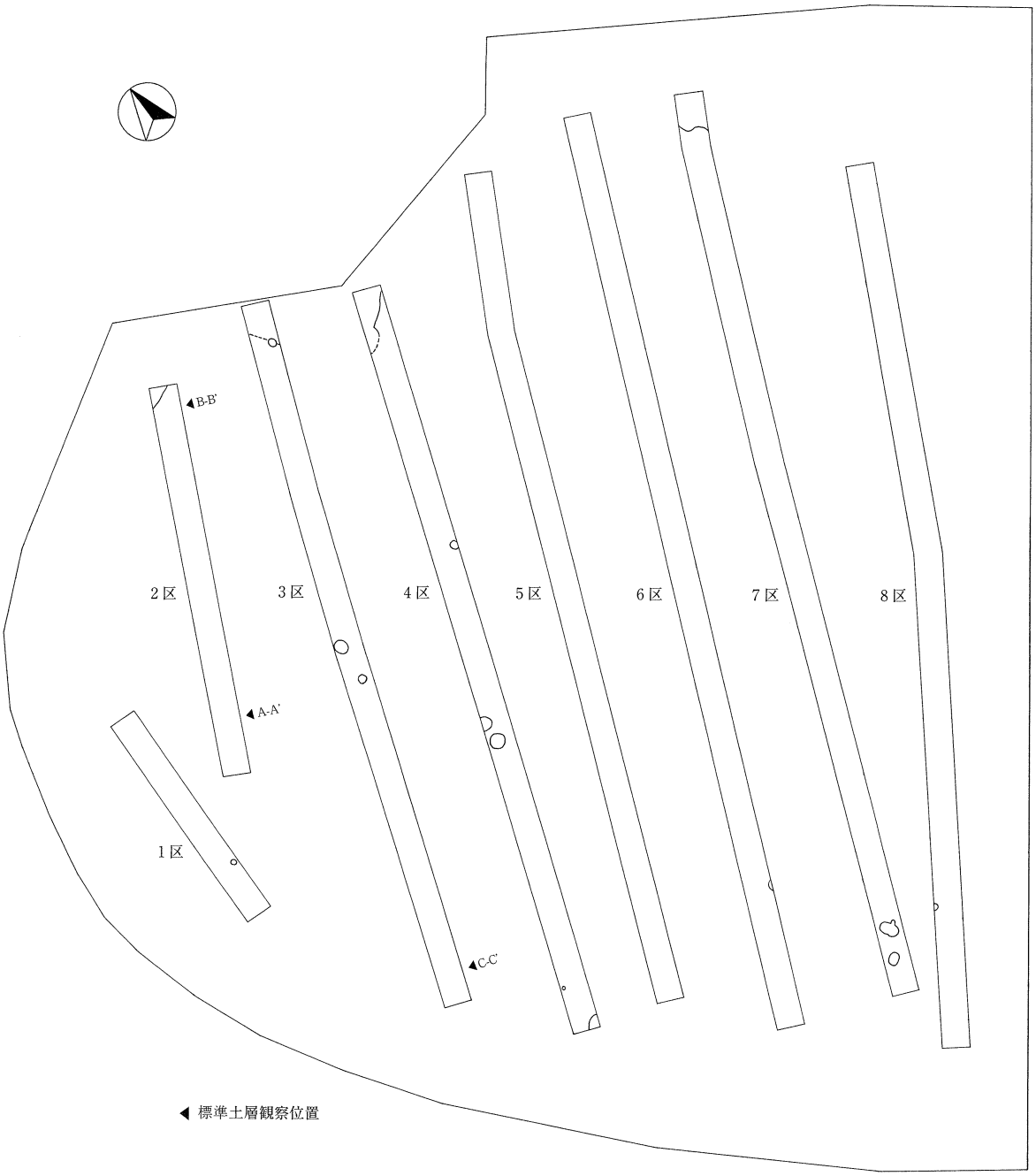
第４節　基本層序

基本的な土層は、表土層の腐食土層とその下にある黒褐色土層～暗褐色土層、基盤となる明黄褐色土層（ローム層）である。このような土層の堆積状態は八ヶ岳西麓で普遍的にみられるものである。

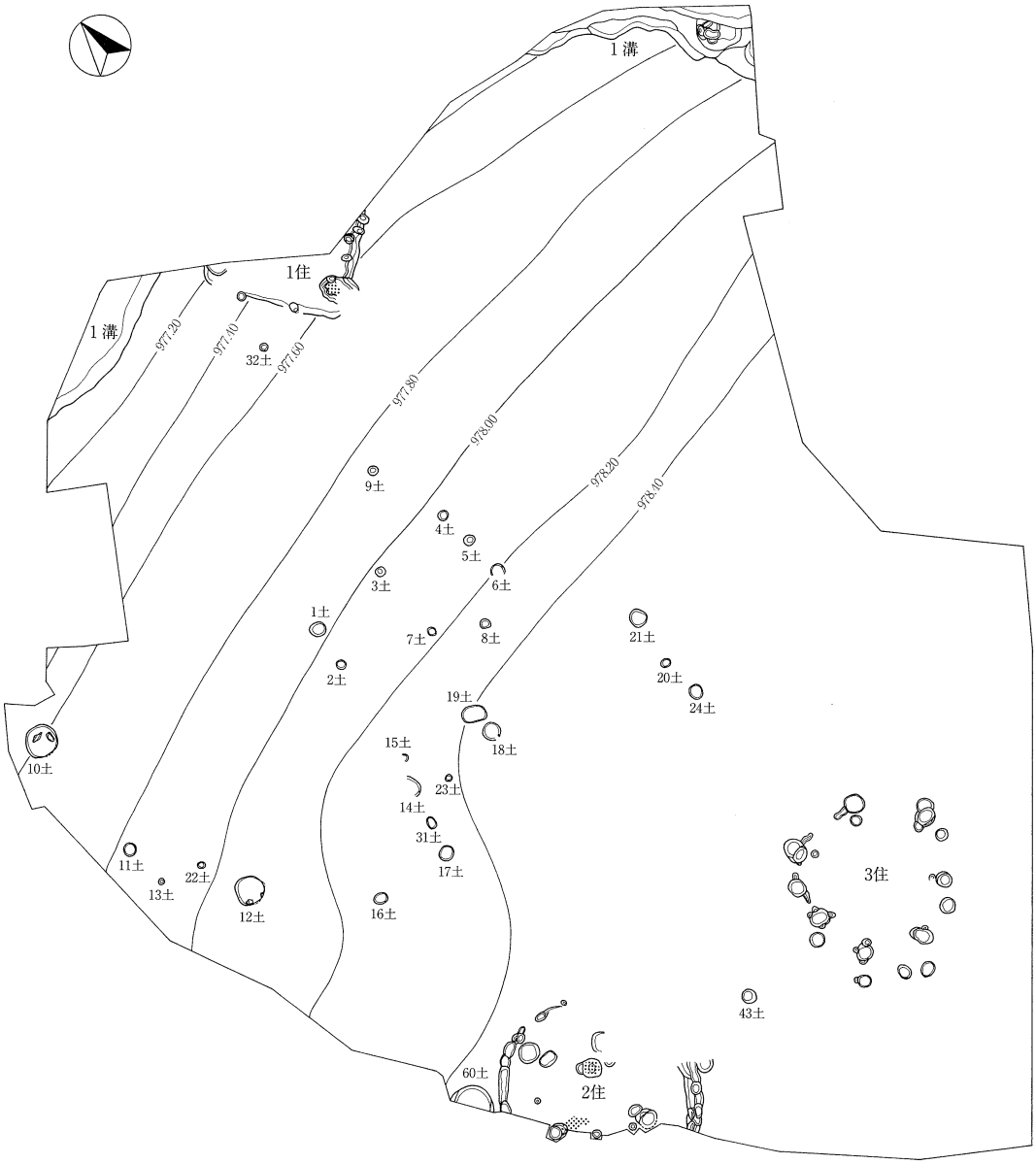


A-A′～C-C′
1　旧保育園造成時の埋土・撹乱
2　黒褐色粘質土10YR3/1　耕作土（畑）
3　黒色土7.5（10）YR1.7/1　地山？　粒子細
4　黒褐色土5YR2/1～3/1　2/1は粘性・締りあり
　ローム粒子少　ローム塊2～5mm少
5　黒褐色土10YR3/2～暗褐色土10YR3/3・3/4　硬い
　ローム粒子少　ローム塊2～5mm少
6　明黄褐色土10YR6/6
　下位に礫2mm～3cm含む

第４図　基本層序（１/80）



第５図　試掘位置図（1/250）



第６図　遺構全体図（１/250）

第３章　検出された遺構と遺物

第１節　遺構と遺物の概要

遺構　竪穴住居址、土坑、溝址が検出された。竪穴住居址は３軒あり、縄文時代（中期）が２軒、平安時代が１軒である。土坑番号を付したものは71箇所あるが、その半分以上は住居址に伴う柱穴である。また残る土坑も多くが柱穴とみられる小さな穴で、一般的に土坑と呼ばれるものは数箇所である。溝址は２地点で確認された。西から入る浅く小さな谷に沿うこと、埋土の上層どうしが類似することから、同じ溝址と考えられる。近世陶器が出土しているので、この時期の溝址と考えられる。

遺物　出土点数は極めて少なく、表土層・撹乱出土の遺物を合わせたとしても整理箱１箱に満たない。旧保育園の建設工事の際に遺構の上面が削平された上、その土の大半が敷地外へ持ち出されたとみられる状況から、出土量の少なさは当然のことと思われる。また削平された遺構がある中で、一定数の遺構が残されている状態からみて、もともと遺構の薄い場所であったことが考えられる。この点も出土点数の少なさに関係する可能性が高い。

内容としては、縄文時代中期土器（前半・後半）・後期土器（前半）、平安時代土師器、平安時代灰釉陶器、中世土師質土器、近世陶器、黒曜石である。黒曜石は総数49点、総重量189.5ｇが出土した。器種は原石１点、石核４点、不定形石器５点、両極石器５点、剥片・砕片34点である。

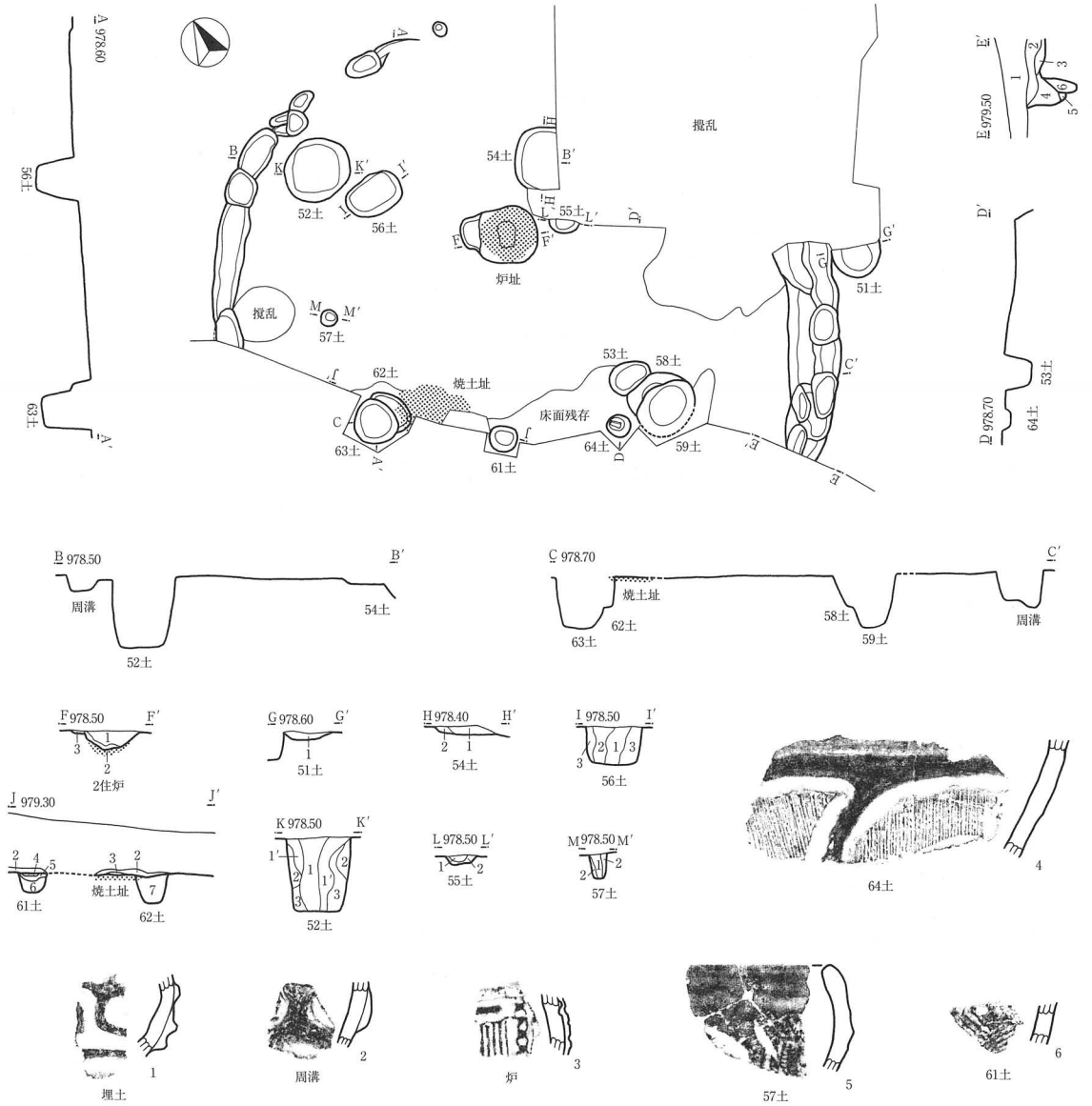
第２節　縄文時代の遺構と遺物

（１）竪穴住居址

２号住居址（第７図）

遺構　調査区の南側から検出された。ここは馬の背状を呈する高まりの頂部付近である。

旧保育園建設時の造成、および建物基礎等の大きな掘削によって住居址が乱された上、アカマツの大木が住居址内に根を張っていた。また住居址の約１／３が調査区域外にあるため、完掘することができていない。このような状態であったが、周溝、主柱穴、炉址などが残っており、住居構造の大略をうかがうことができた。周溝の形状と主柱穴の位置などから、隅丸五角形を呈する住居址と考えられる、規模は東西７ｍで、南北は6.5ｍ程度と推測される。出入口部が南西と考えられるので、主軸方向はＮ－27°－Ｅとなる。壁は先の工事の際に削り取られていたが、ちょうど調査区境が旧保育園と隣接する市道の境界付近となるために、調査区境の断面は乱されていなかった。そのため表土層の下に周溝から直立する約20㎝の壁が確認された。周溝は壁下を全周していたのであろうが、北側は削平されほとんど残っていない。一方、東西の周溝は良い状態で検出された。東側の周溝は高低差のある２条の溝が並んでおり、土層断面で内側の深い溝から外側の浅い溝への作り替えが確認された。床面は調査区境の一部に硬化した面が僅かに残されており、その一部が不整形に焼けていた。本址に時期の異なる住居址が重複する様子が見られないため、この焼土址は本址に伴うものと考えられる。焼土は10㎝の厚みがあり、長時間、相当の熱を受けたようである。住居址内から12箇所の土坑が検出された。深さは52号土坑が83㎝、53号土坑が35㎝、54号土坑が７㎝、55号土坑が12㎝、56号土坑が45㎝、57号土坑が31㎝、58号土坑が40㎝、59号土坑が65㎝、61号土坑が23㎝、62号土坑が31㎝、63号土坑が56㎝、64号土坑が10㎝を測る。断ち割り作業によって、52・56・57号土坑から柱痕が確認された。土坑の形状、深さ、住居内の位置から、52・53・56・58・59・62・63号土坑が本址の主柱穴で、炉を中心に対角



E-E′ 2住・周溝
1 撹乱
2 黒褐色土10YR2/2 硬い 2住埋土
ローム粒子多 ローム塊2mm～1cm少 礫2～5mm少 炭化物2～5mm多 焼土粒子少 焼土塊2mm少
3 黒褐色土10YR2/3 特に硬い 2住埋土
ローム粒子多 ローム塊2～5mm少 礫2～5mm少 炭化物2mm少
4 黒褐色土10YR2/2～2/3 硬い 新しい周溝
ローム粒子多 ローム塊2mm～1.5cm少 礫2～5mm少 炭化物2mm少
5 黒褐色土10YR3/2 硬い 新しい周溝
ローム粒子多 ローム塊2mm～1.5cm多 礫2～5mm少 炭化物2mm少
6 暗褐色土10YR3/3～3/4 特に硬い 古い周溝
ローム粒子多 ローム塊2mm～2cm多 礫2mm～1cm少 炭化物2mm少

F-F′ 2住炉
1 黒褐色土10YR2/2～2/3
ローム粒子少 ローム塊2mm～1cm少 礫2mm～1cm少 炭化物2mm～1cm少 焼土粒子少 焼土塊2mm～1cm少
2 暗赤褐色土5YR3/2 硬い
ローム粒子多 ローム塊2mm～1cm少 礫2mm～1cm少 炭化物2～5mm少 焼土粒子多 焼土塊2mm～1cm多
3 黒褐色土10YR2/3～3/2 炉石据えるための掘方、埋土か
ローム粒子多 ローム塊2mm～1cm少 礫2～7mm少 炭化物2～5mm少 焼土粒子多 焼土塊2mm～1cm多

G-G′ 61・62土
1 撹乱
2 黒褐色土10YR2/2 2住埋土
ローム粒子多 ローム塊2mm～1cm少 礫2～5mm少 炭化物2～5mm少 焼土粒子少 焼土塊2～5mm少
3 褐色土10YR4/4 貼床
ローム粒子多 ローム塊2mm～1cm多 礫2mm少
4 暗赤褐色土10YR3/3 硬い 貼床
ローム粒子多 ローム塊2mm～1cm多 礫2mm少
5 黒褐色土10YR3/3 硬い 61土
ローム粒子多 ローム塊2～5mm少 礫2～5mm少
6 褐色土10YR4/4 特に硬い 61土
ローム粒子多 ローム塊2mm～1.5cm多 礫2mm～1cm少
7 6層に類似 62土

H-H′ 51土
1 黒褐色土10YR2/3
ローム粒子多 ローム塊2mm～1cm多 礫2mm～1.5cm多 炭化物2～5mm少

I-I′ 52土
1 黒褐色土10YR2/2
ローム粒子多 ローム塊2mm～1.5cm少 礫2～7mm少 炭化物2mm～1cm多 焼土粒子少
1′ 黒褐色土10YR2/2～2/3
ローム粒子多 ローム塊2mm～3cm少 礫2mm～1cm少 炭化物2mm～1cm少 焼土粒子少 焼土塊2～5mm少
2 黒褐色土10YR2/3～3/2
ローム粒子多 ローム塊2mm～1.5cm少 礫2mm～1cm少 炭化物2～7mm少
3 黒褐色土10YR3/2～暗褐色土10YR3/3
ローム粒子多 ローム塊2mm～3cm多 礫2mm～1cm多 炭化物2mm少

J-J′ 54土
1 黒褐色土10YR2/3 硬い
ローム粒子多 ローム塊2mm～1cm少 礫2mm～1cm少 炭化物2～7mm多 焼土粒子少
2 暗褐色土10YR3/3 硬い
ローム粒子多 ローム塊2mm～1cm多 礫2mm～1cm少 炭化物2～7mm少 焼土粒子少

K-K′ 55土
1 黒褐色土10YR3/2 柱痕
ローム粒子少 ローム塊2～7mm少 礫2～5mm少 炭化物2～5mm少
2 黒褐色土10YR2/3 硬い
ローム粒子多 ローム塊2mm～1cm多 礫2mm～1cm少 炭化物2～5mm少 焼土粒子少 焼土塊2mm少

L-L′ 56土
1 黒褐色土10YR2/2 柱痕？ 抜き取り痕？
ローム粒子多 ローム塊2mm～2cm少（下位に多い） 礫2mm～1.5cm少 炭化物2mm～1.5cm多 焼土粒子少 焼土塊2mm少
2 黒褐色土10YR3/2 柱痕？ 抜き取り痕？
ローム粒子多 ローム塊2mm～1.5cm多 礫2mm～1cm少 炭化物2～7mm少 焼土粒子少
3 暗褐色土10YR3/3 ほとんどローム粒子・塊
ローム粒子多 ローム塊2mm～3cm多 礫2mm～1cm少

M-M′ 57土
1 黒褐色土10YR2/3 柱痕
ローム粒子少 ローム塊2mm少 礫2～5mm少 炭化物2mm～1cm少 焼土粒子少 焼土塊2mm～1.5cm少
2 暗褐色土10YR3/3～3/4
ローム粒子少 ローム塊2～7mm少 礫2～5mm少 炭化物2mm少

第７図 ２号住居址（1/80、遺物は1/4）

線上に位置する４箇所の主柱穴（＝４本主柱）が同時存在したものと考えられる。主柱穴には、重複するもの（62号と63号、53号と58号、58号と59号）、貼床されたもの（53号、56号、62号）がある。これらの新旧関係を整理すると、主柱穴は内側から外側へ、規模を増して作り替えられたこととなる。その回数は１回のものもあれば（56号→52号）、数回のものもあり（53号→58号→59号）、作り替えが一様でなかったことがわかる。こうした主柱穴の作り替えは「同心円状の拡張」と呼ばれており、東側の周溝にみられる外側への作り替えとともに行われたものであろう。このように考えれば、西側に古い周溝があってもよさそうであるが、その痕跡は確認されていない。削平されたのか、あるいは同じ周溝を使い続けたのかのどちらかである。主柱穴よりひと回り小さな61・64号土坑は、その位置から「対ピット」と呼ばれることの多い出入口の施設に関わる柱穴の可能性がある。どちらも貼床されているため、拡張前の住居に伴うものであろう。炉は住居の中央から北に寄った場所にある。本来、石囲炉であったとみられるが、詰石の一つも残されていなかった。西側にある張り出しは炉石を据えるための掘方である可能性がある。炉底から側面がしっかりと焼けており、最も厚いところで８cmを測る。

遺物　周溝、土坑、炉などから土器・黒曜石が少量出土した。

土器は15点が出土し、６点を図示した（第７図）。出土地点・時期は以下のとおりである。

埋土（調査区境）：中期後半曽利Ⅲ～Ⅳ式（１）。

周溝（東側）：　中期後半曽利Ⅲ～Ⅳ式（２）。

炉址：中期後半曽利Ⅰ式（３）。

57号土坑：中期後半加曽利Ｅ式系（５）。

61号土坑：中期後半？（６）。

64号土坑：中期後半曽利Ⅲ～Ⅳ式（４）。

黒曜石は26点が出土した。出土地点、点数、重量、器種は以下のとおりである。

周溝：６点、15.9ｇ。両極石器２点、剥片・砕片４点。

52号土坑：10点、21ｇ。不定形石器１点、剥片・砕片９点。

56号土坑：１点、1.9ｇ。不定形石器１点。

58・59号土坑：１点、0.5ｇ。剥片・砕片１点。

62号土坑：３点、25.9ｇ。不定形石器１点、石核１点、剥片・砕片１点。

63号土坑：４点、26.8ｇ。石核１点、剥片・砕片３点。

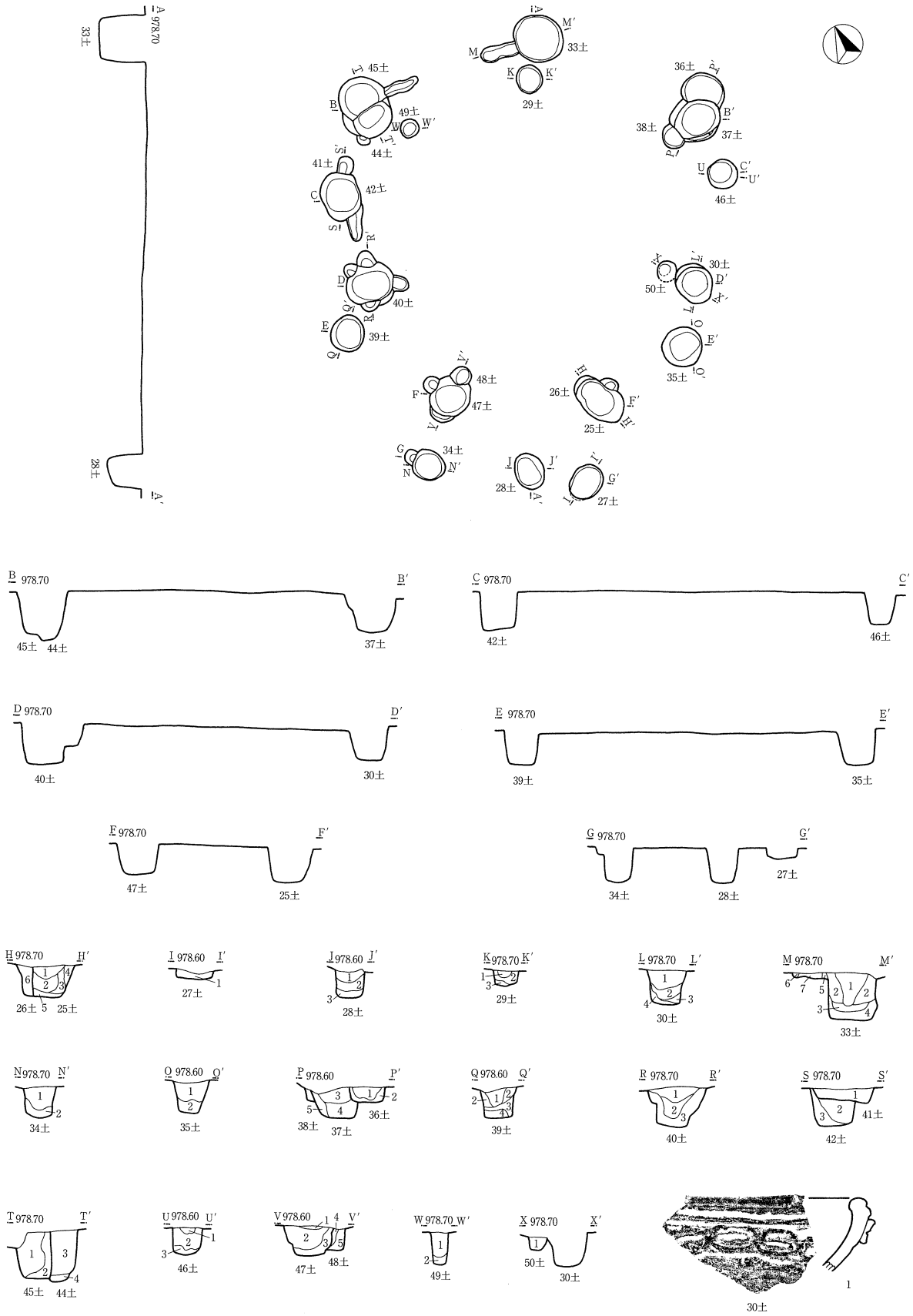
64号土坑：１点、0.5ｇ。剥片・砕片１点。

時期　住居の形状と構造、出土遺物からみて、中期後半曽利Ⅲ～Ⅳ式期の住居址と考えられる。

３号住居址（第８図）

遺構　調査区の南側から検出された。ここは馬の背状を呈する高まりの頂部付近である。

旧保育園建設時の造成によって、壁・床・炉址が削平され、柱穴（土坑）と柱穴どうしをつなぐ「間仕切り溝」が残されているに過ぎない。柱穴の数および位置から、最底２組の柱穴の組み合わせが見出せるため、本址は建て替えられた住居と考えられる。その際、住居の規模、主軸線、柱穴の数および配置を大きく変えることなく、南から北へ１ｍ前後の移動をしているようである。以上から、本址は平面形が南北に細長い楕円形で、７ｍ×６ｍほどの規模と推測される。主軸方向はＮ－24°－Ｅを示す。調査時に23箇所の穴に土坑番号を付したが、整理作業の段階で41号土坑を間仕切り溝の一部としている。深さは25号土坑が46cm、26号土坑が17cm、27号土坑が11cm、28号土坑が47cm、29号土坑が23cm、30号土坑が48cm、33号土坑が64cm、34号



第８図　３号住居址（1/80、遺物は1/4）

H-H´25土
1 黒色土7.5YR2/1+黒褐色土10YR2/2（一部に暗褐色土10YR3/4あり）
ローム粒子多　ローム塊2mm～2cm多　礫2mm～1cm少　炭化物2mm少　焼土粒子少　焼土塊2mm少
2 黒色土7.5YR1.7/1
ローム粒子多　ローム塊2mm～4cm多　礫2mm～2cm少　炭化物2mm少
3 黒褐色土10YR2/2+黒色土7.5YR2/1
ローム粒子多　ローム塊2mm～1.5cm多　礫2mm～1cm少　炭化物2mm～1cm少
4 黒褐色土10YR3/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～2cm多　礫2mm～1cm少
5 暗褐色土10YR3/3　硬い
ローム粒子多　ローム塊2mm～1.5cm多　礫2mm～1cm少
26土
6 暗褐色土10YR3/4+黒色土7.5YR2/1　混在土
ローム粒子多　ローム塊2mm～1.5cm多　礫2mm～1cm少
I-I´27土
1 黒褐色土10YR2/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～2cm多　礫2～5mm少　炭化物2mm～1cm多
J-J´28土
1 黒色土7.5YR2/1+黒色土10YR1.5/1+黒褐色土10YR2/
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多　炭化物2～7mm多
2 黒色土7.5YR2/1+黒褐色土10YR2/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～2cm多　礫2～5mm少　炭化物2～7mm多
3 黒褐色土10YR2/2～2/3　硬い
ローム粒子多　ローム塊2mm～1.5cm多　礫2mm～1cm少　炭化物2～5mm少
K-K´29土
1 黒色土7.5YR2/1　柱痕
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多　礫2mm～1cm少　炭化物2mm～1cm多　焼土粒子少　焼土塊2mm少
2 黒褐色土10YR2/2～2/3　硬い
ローム粒子多　ローム塊2mm～3cm多　礫2mm～1cm少　炭化物2～7mm多　焼土粒子少　焼土塊2mm少
3 黒褐色土10YR3/2　硬い
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多　礫2～5mm少　炭化物2～7mm少
L-L´30土
1 黒褐色土10YR2/3+黒色土10YR2/1
ローム粒子多　ローム塊2mm～10cm多　礫2mm～1.5cm多　炭化物2～7mm少
2 明黄褐色土10YR6/6　全体がローム塊
3 黒色土7.5YR2/1
ローム粒子少　ローム塊2mm～1cm少
4 黒褐色土10YR2/3
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多　礫2mm～1cm少
M-M´33土
1 黒色土7.5YR2/1　柱痕
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多　礫2mm～1cm少　炭化物2mm～1cm多　焼土粒子多　焼土塊2mm～1.5cm多
2 黒褐色土10YR2/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～2cm多　礫2mm～1.5cm少　炭化物2mm～1cm少
焼土粒子少　焼土塊2～5mm少
3 黒褐色土10YR2/3　硬い
ローム粒子多　ローム塊2mm～1.5cm多　礫2～5mm少　炭化物2mm少
4 黒褐色土10YR2/2　硬い
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm少　礫2～5mm少　炭化物2mm少
間仕切り溝
5 黒褐色土10YR2/3
6 黒褐色土10YR3/2
ローム粒子多　ローム塊2～7mm多　礫2mm少　炭化物2～5mm少　焼土粒子少　焼土塊2mm少
7 暗褐色土10YR3/4　硬い
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多　礫2～5mm少　炭化物2mm少　焼土粒子少　焼土塊2mm少
N-N´34土
1 黒褐色土10YR2/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～1.5cm多　礫2mm～1cm少　炭化物2～7mm多　焼土粒子少　焼土塊2～5mm少
2 黒褐色土10YR3/2　硬い
ローム粒子多　ローム塊2mm～2cm少　礫2～5mm少　焼土粒子少
O-O´35土
1 黒褐色土10YR2/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多　礫2mm～1.5cm多　炭化物2mm～1cm多
2 黒褐色土10YR2/3～暗褐色土10YR3/3　硬い
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多　礫2mm～1cm多　炭化物2～5mm多
P-P´36土
1 黒褐色土10YR2/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～1.5cm多　礫2mm～1cm多　炭化物2mm～1.2cm多
焼土粒子少　焼土塊2mm少
2 黒褐色土10YR2/3
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm少　礫2mm～1cm少　炭化物2～5mm少　焼土粒子少　焼土塊2mm少
37土
3 黒褐色土10YR2/2　締まり弱い
ローム粒子多　ローム塊2mm～3cm多　礫2mm～3cm多
4 黒褐色土10YR3/2　硬い
ローム粒子多　ローム塊2mm～2cm多　礫2mm～2cm多
5 黒褐色土10YR2/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～1.5cm少　礫2mm～1cm少
Q-Q´39土
1 黒褐色土10YR2/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm少　礫2mm～1cm少　炭化物2～7mm多　焼土粒子少　焼土塊2～5mm少
2 黒褐色土10YR2/2～2/3
ローム粒子多　ローム塊2mm～3cm多　礫2mm～1cm少　炭化物2～7mm多　焼土粒子少　焼土塊2～5mm少
3 暗褐色土10YR3/3　硬い
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多　礫2mm～1cm少　炭化物2mm少　焼土粒子少
4 暗褐色土10YR3/4　特に硬い
ローム粒子多　ローム塊2mm～3cm多　礫2mm～1cm少　炭化物2mm少　焼土粒子少
R-R´40土
1 黒褐色土10YR2/3　硬い
ローム粒子多　ローム塊2mm～3cm多　礫2mm～1cm少　炭化物2mm少　焼土粒子少　焼土塊2mm少
2 黒褐色土10YR2/2+黒色土7.5YR2/1
ローム粒子多　ローム塊2mm～3cm多　礫2mm～1cm少　炭化物2mm少　焼土粒子少
3 黒褐色土10YR3/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～3cm多　礫2mm～1cm少　炭化物2mm少　焼土粒子少
S-S´41土（間仕切り溝）
1 黒褐色土10YR2/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～1.5cm少　礫2～5mm少　炭化物2～7mm多　焼土粒子多　焼土塊2mm～1.5cm少
42土
2 黒色土10YR2/1+黒褐色土10YR3/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～2cm多　礫2mm～1cm少　炭化物2～7mm少　焼土粒子少　焼土塊2mm少
3 黒褐色土10YR3/2～暗褐色土10YR3/3
ローム粒子多　ローム塊2mm～1.5cm多　礫2mm～1cm多　炭化物2～5mm少　焼土粒子少　焼土塊2～5mm少
T-T´45土
1 黒褐色土10YR2/2　柱痕
ローム粒子多　ローム塊2mm～1.5cm多　礫2mm～1cm少　炭化物2mm～1cm多
焼土粒子少　焼土塊2～7mm少
2 黒褐色土10YR2/3　柱痕の一部か？
ローム粒子多　ローム塊2mm～2cm多　礫2mm～1cm少　炭化物2～7mm多　焼土粒子少　焼土塊2～5mm少
44土
3 黒褐色土10YR3/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～5cm多　礫2mm～1cm少　炭化物2mm少
4 黒褐色土10YR2/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm少　礫2mm～1cm少　炭化物2mm少
U-U´46土
1 黒褐色土10YR2/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～1.5cm多　礫2mm～1cm少　炭化物2mm～1cm多
焼土粒子少　焼土塊2～5mm少
2 黒褐色土10YR2/3
ローム粒子多　ローム塊2mm～3cm多　礫2mm～1cm少　炭化物2mm～1cm多　焼土粒子少　焼土塊2mm少
3 暗褐色土10YR3/3　硬い
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多　礫2mm～1cm少　炭化物2～5mm少
V-V´47土
1 黒褐色土10YR2/3
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多　礫2～5mm少　炭化物2mm多
2 黒褐色土10YR2/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～5cm多　礫2～5mm少
3 黒褐色土10YR3/2～暗褐色土10YR3/3　硬い
ローム粒子多　ローム塊2mm～2cm多　礫2mm～1cm少　炭化物2～5mm少
48土
4 黒褐色土10YR2/3
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多　礫2～5mm少　炭化物2～7mm少
5 黒褐色土10YR3/2～暗褐色土10YR3/3
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多　礫2mm～1cm少
W-W´49土
1 黒褐色土10YR2/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～1.5cm多　礫2～5mm少　炭化物2mm～1cm多　焼土粒子少
2 暗褐色土10YR3/3
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多　礫2～5mm少　炭化物2～5mm少
W-W´50土
1 暗褐色土10YR3/3～3/4
ローム粒子多　ローム塊2mm～1.5cm多　礫2～7mm少

土坑が47cm、35号土坑が50cm、36号土坑が24cm、37号土坑が50cm、38号土坑が30cm、39号土坑が46cm、40号土坑が56cm、41号土坑が22cm、42号土坑が53cm、44号土坑が71cm、45号土坑が63cm、46号土坑が40cm、47号土坑が39cm、48号土坑が30cm、49号土坑が45cm、50号土坑が18cmを測る。大半の柱穴で断ち割り作業を行ったが、柱痕の認められたものは33号土坑のみである。埋土の特徴は、ローム塊を多く含み、硬く締まることである。建て替えの前後で、同時存在した柱穴の数と配置は、大きく違わないと考えるが、建て替え前の方が数箇所多いようである。柱穴の組み合わせを列挙すると、建て替え前が27～29・34・35・38？・39・42・46・49号土坑、建て替え後が25・26・30・33・36？・37・40・44・45・47・48？・50？号土坑となる。なお建て替え後の柱穴である25号土坑と26号土坑、44号土坑と45号土坑で、それぞれ内側から外側への掘り直し

が確認されている。建て替え後の柱穴に伴う溝址が、いわゆる「間仕切り溝」である。本来、柱穴どうしを連結するようにめぐっていたのであろうが、浅い部分は削平されてしまったと思われる。

遺物　柱穴から土器・黒曜石が少量出土した。

土器は30号土坑から１点出土しただけである（第８図１）。浅鉢で、中期前半井戸尻Ｉ式とみられる。

黒曜石は７点ある。出土遺構、点数、重量、器種は以下のとおりである。

25号土坑：１点、0.3ｇ。剥片・砕片。

29号土坑：１点、0.4ｇ。剥片・砕片。

30号土坑：２点、22.6ｇ。石核１点、剥片・砕片１点。

34号土坑：１点、0.4ｇ。剥片・砕片。

44・45号土坑：２点、1.6ｇ。ともに剥片・砕片。

時期　住居の形状と構造、出土遺物からみて、中期前半井戸尻Ｉ式期の住居址と考えられる。

（２）土坑（第９図）

ここでは住居址に伴わない30箇所ほどの土坑について報告する。

遺物の出土したものは５箇所である。どの土坑も縄文土器と黒曜石の破片が少量出土しただけであるが、いずれも縄文時代の遺構とみるのが自然である。遺物を伴わない他の土坑は、時期を特定・推測する積極的な根拠に欠けるものの、埋土の色調・締まり具合を見る限り、縄文時代の遺構としてよいと思われる。

土坑は調査範囲の中央から西側にかけてまとまって発見されている。同様の密度で東側に広がっていたかは不明であるが、国道152・299号の切通し断面に住居址が確認されていることを考慮するならば、ある程度の数の遺構があった可能性は十分に考えられる。旧保育園建設に伴う造成時の削平が、東側ほど深くまで及ぶため、その際に削り取られてしまったのではなかろうか。ただし、３号住居址のように残されている遺構もあることから、10・12・60号土坑のような規模の大きな土坑が幾つもつくられていたとは考えにくい。これに対し、北側に土坑がみられない点については、造成時の削平が明黄褐色土層に達していないので、すべてが削り取られてしまったとは考えられない。もともとこの場所に土坑がつくられていなかったと考えるべきであろう。

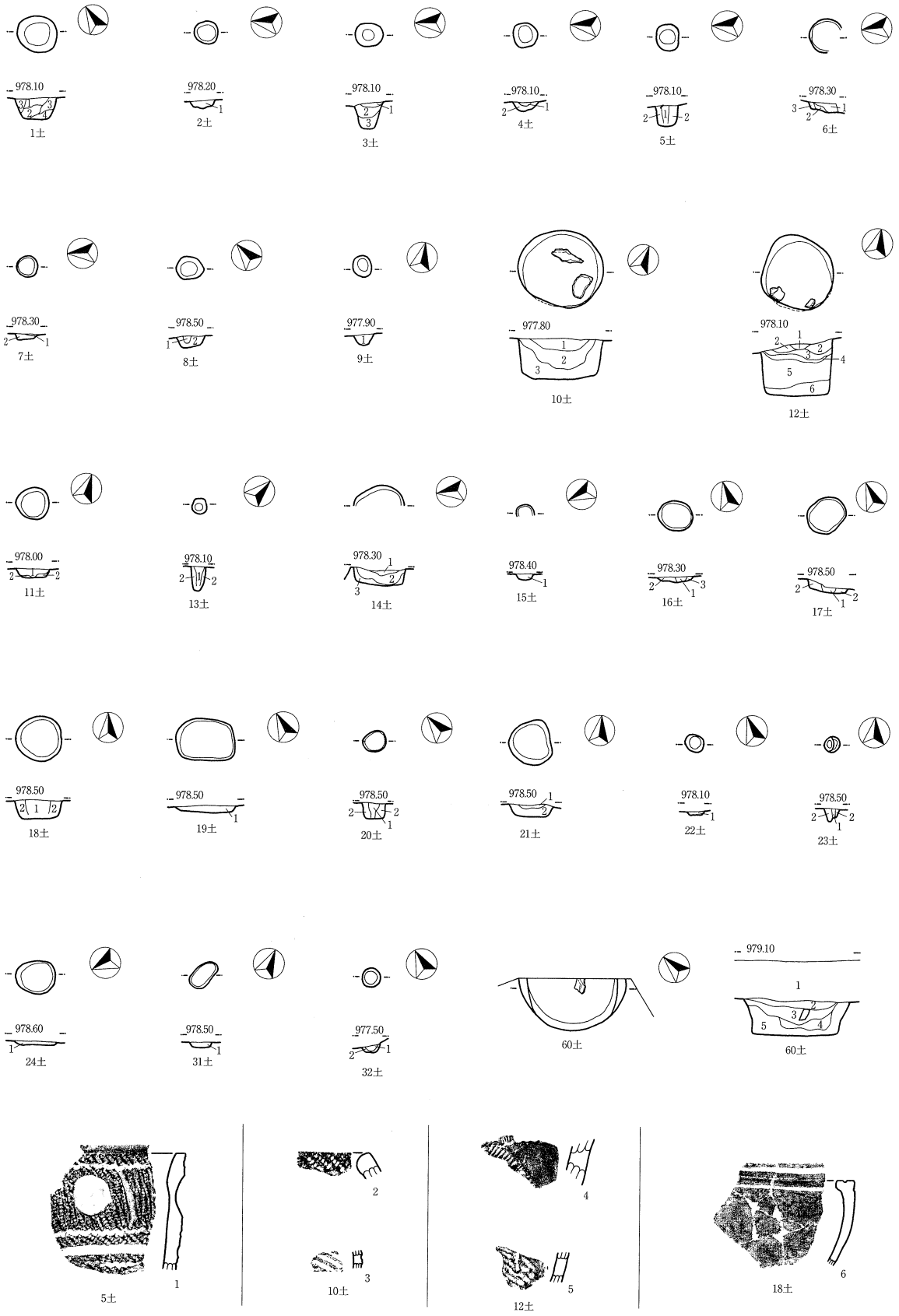
土坑の大半は、円形を平面形の基調とするが、規模はさまざまである。それでも、深さを除けば、直径20～60cmの小さなものと、100cm前後の大きなものに大別することができる。

小さな土坑　いわゆる「ピット」と呼ばれるものである。形状と規模に加え５・８・13・17・18・20・23号土坑などの土層断面に柱痕が認められたことから、多くが柱穴と考えられる。１～７号土坑は、穴どうしの位置関係から掘立柱建物址に見えないこともないが、穴の規模がまちまちであること、周囲に類似する規模の穴が散在することから当該遺構の認定を見送った。

遺物は５・18号土坑から土器片が、17号土坑から黒曜石が出土した。５号土坑は土器が１点出土した。中期前半藤内式（１）である。18号土坑は土器が２点出土した。時期不明の鉢形（６）と、器壁が厚く外面の良く磨かれた文様のない土器である。17号土坑は黒曜石が３点、2.5ｇあり、いずれも剥片・砕片である。

小さな土坑とした遺構の時期は、出土した土器の時期からみて、中期前半藤内式期以降と考えられる。

大きな土坑　10・12・19・60号土坑が該当する。10・12・60号土坑は、平面形が円形で、壁（壁の下部）が直立ないし部分的に袋状となるようにつくられている。また埋土に含まれる明黄褐色土塊の多寡、締まり具合に違いがあるものの、分層された各層がいわゆる「レンズ状」の堆積を示す点で共通する。こうした形状と埋土の堆積状態を示す土坑は、貯蔵穴と推定される穴の多くに見ることができるため、当該土坑に対し



第９図　土坑（１/80、遺物は１/４）

1土
1　黒褐色土10YR2/2
ローム粒子少　ローム塊2～5mm少
2　黒色土7.5YR2/1
ローム粒子少　ローム塊2～5mm少　炭化物2mm少
3　黒褐色土10YR3/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～1.5cm少　炭化物2～7mm少
4　黒色土10YR2/1　硬い
ローム粒子少
2土
1　黒褐色土10YR2/2
ローム粒子少　ローム塊2～5mm少
3土
1　黒褐色土10YR2/2
ローム粒子少　ローム塊2mm少
2　黒色土10YR2/1　硬い
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多　炭化物2mm多
3　黒褐色土10YR2/3～3/2　硬い
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多　炭化物2mm少
4土
1　黒色土10YR2/1　柱痕
ローム粒子多　ローム塊2～７mm多
2　黒褐色土10YR2/3
ローム粒子少　ローム塊2mm少
5土
1　黒色土7.5YR2/1　柱痕
ローム粒子少
2　黒褐色土10YR2/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm少
6土
1　黒褐色土10YR3/2～暗褐色土10YR3/3
ローム粒子多　ローム塊2mm～1.5cm少　炭化物2mm少
2　黒色土7.5YR1.7/1
ローム粒子少
3　黒褐色土10YR2/3
ローム粒子少　ローム塊2mm少
7土
1　黒褐色土10YR2/2
ローム粒子少
2　黒褐色土10YR3/2
ローム粒子多　ローム塊2mm少
8土
1　黒色土7.5YR2/1　柱痕
ローム粒子少
2　黒褐色土10YR2/2～2/3
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm少　炭化物2mm少
9土
1　黒褐色土10YR2/3～3/2
ローム粒子少　ローム塊2mm少　炭化物2mm少
10土
1　黒褐色土5YR2/1　硬い
炭化物2mm少
2　黒色土5YR1.7/1
炭化物2～5mm多
3　黒褐色土10YR2/2
ローム粒子少　ローム塊2～7mm少　炭化物2～5mm少
11土
1　黒色土7.5YR2/1
ローム粒子少　ローム塊2～7mm少
2　暗褐色土10YR3/3
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多
12土
1　攪乱
2　黒色土5YR1.7/1
炭化物2mm少
3　黒褐色土5YR2/1
ローム粒子少　ローム塊2～7mm少　炭化物2mm少
4　暗褐色土10YR3/4　硬い　壁の崩落か？
ローム粒子多　ローム塊2mm～1.5cm多
5　黒褐色土10YR2/2～2/3
ローム粒子多　ローム塊2mm～2cm多（東壁際に集中）　炭化物2mm少
6　黒褐色土10YR2/2　硬い
ローム粒子少　ローム塊2～5mm少　炭化物2mm少
13土
1　黒褐色土10YR2/2　柱痕
ローム粒子少
2　黒褐色土10YR2/3～3/2
ローム粒子多　ローム塊2～5mm少
14土
1　黒褐色土10YR2/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多　炭化物2mm少
2　黒褐色土10YR3/2～暗褐色土10YR3/3
ローム粒子多　ローム塊2mm～1.5cm多　炭化物2mm少
3　黒色土10YR2/1
ローム粒子多　ローム塊2mm少　礫2～5mm少　炭化物2mm少
15土
1　黒褐色土7.5YR2/1
ローム粒子少　ローム塊2～7mm少
16土
1　黒色土10YR2/1　柱痕
ローム粒子少　ローム塊2～7mm少
2　黒褐色土10YR2/2～2/3
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多
17土
1　黒色土10YR2/1　柱痕
ローム粒子少　炭化物2mm少
2　黒褐色土10YR2/2
ローム粒子少　ローム塊2mm～1.5cm少　炭化物2mm少
18土
1　黒色土10YR2/1　柱痕
ローム粒子少　ローム塊2mm～1cm少　炭化物2～7mm多
2　黒褐色土10YR2/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～2cm多　炭化物2～5mm少
19土
1　黒褐色土10YR2/2または黒色土5YR2/1
ローム粒子少　ローム塊2mm～4cm少　炭化物2～7mm多
20土
1　黒褐色土10YR2/2　柱痕
ローム粒子少　炭化物2mm少
2　黒褐色土10YR2/3
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多
21土
1　黒色土10YR2/1
ローム粒子少　ローム塊2～7mm少
2　黒褐色土10YR2/2+黒色土10YR2/1
ローム粒子多　ローム塊2mm～2cm多　炭化物2mm少
22土
1　黒褐色土10YR2/2
ローム粒子少　ローム塊2mm～1cm少
23土
1　黒色土7.5YR2/1　柱痕
ローム粒子少　ローム塊2～5mm少
2　黒褐色土10YR2/3
ローム粒子少　ローム塊2～5mm少　炭化物2mm少
24土
1　黒褐色土10YR2/3
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多
31土
1　黒褐色土10YR2/2
ローム粒子少　ローム塊2～7mm少
32土
1　黒色土7.5YR2/1
ローム粒子少　炭化物2mm少
2　黒褐色土10YR3/2
ローム粒子少
60土
1　攪乱
2　黒褐色土10YR2/2
ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm少　礫2～5mm少　炭化物2mm少
3　黒褐色土10YR2/3　硬い
ローム粒子少　ローム塊2mm～1cm少　礫2mm～1cm少　炭化物2mm少
4　黒褐色土10YR3/2　硬い
ローム粒子少　ローム塊2mm～1cm少　礫2～5mm少
5　暗褐色土10YR3/3～3/4
ローム粒子多　ローム塊2mm～3cm多　礫2mm～2cm少　炭化物2～5mm少

て同様の性格を与えておきたい。なお10号土坑の底面直上に残された２つの礫は、「Ｌ」字状を呈しており、故意に置かれた可能性も考えられる。一方、19号土坑は平面形が隅丸長方形、断面形が皿状となる点で、上記の土坑と異なる性格が考えられる。縄文時代の土坑で、このような楕円形を呈するものは墓坑である場合が多いことから、形状的に墓坑の可能性を指摘したい。ただし、埋土に大量の明黄褐色土塊を含み、硬く締まるという、墓坑に特徴的な埋土のあり方は認められない。

遺物は10号土坑から土器が７点、12号土坑から土器が２点出土し、それぞれ２点を図示した（第９図）。10号土坑は２・３で前者が中期後半加曽利Ｅ式系、後者が後期前半堀之内式とみられる。12号土坑は４・５で前者が中期前半藤内式、後者が中期前半（中葉）または中期後半のどちらかである。

大きな土坑とした遺構の時期は、出土した土器の時期からみて、中期前半藤内式期から後期前半堀之内式期の間につくられたものと考えられる。

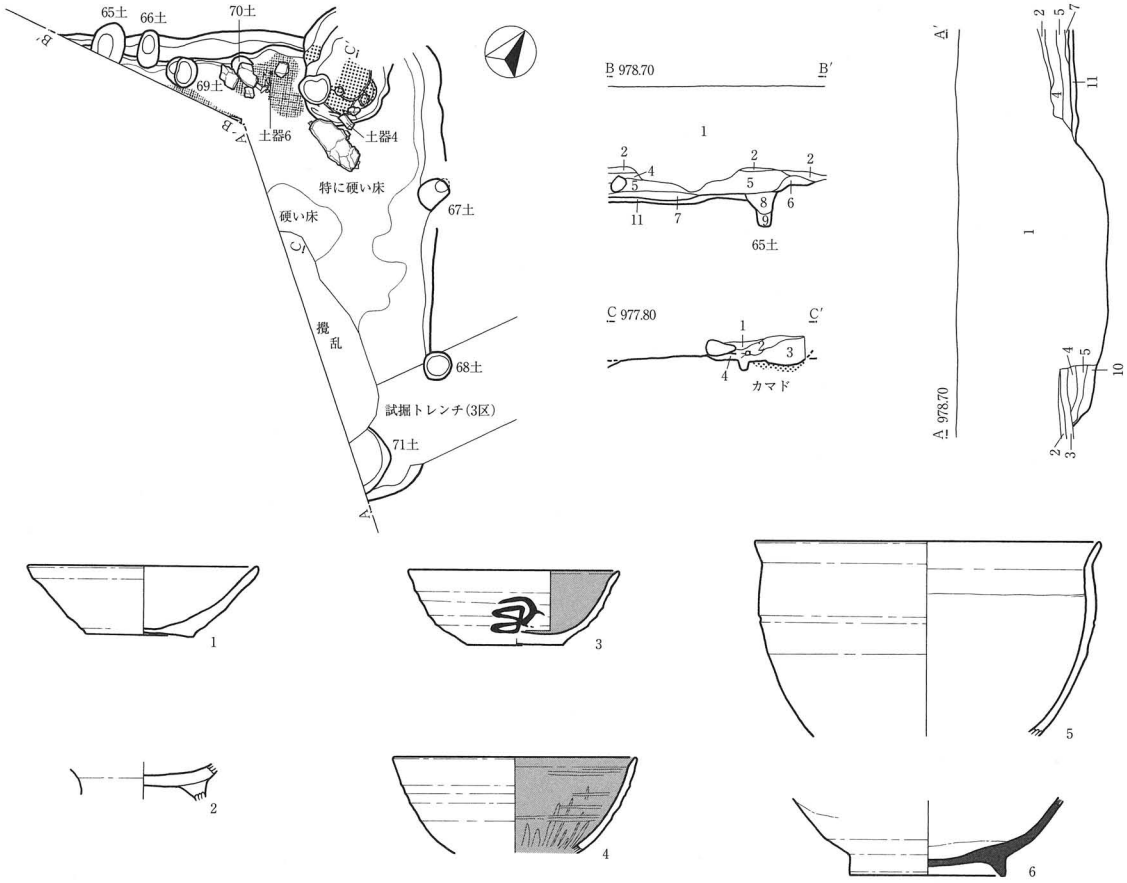
第３節　平安時代の遺構と遺物

（１）竪穴住居址

１号住居址（第10図）

遺構　調査区の北側から検出された。１号溝址と重複し、これに切られることが確認されている。

本址は試掘調査時にその存在が確認された住居址である。この調査の掘削によって西壁の一部が失われたほか、旧保育園の建物基礎や時期不明の攪乱によって床とカマドの一部が破壊されている。しかし、この付近の造成工事が埋土によって行われていたために、遺構全体の遺存状態は良好であった。試掘調査で確認面までの深さがおさえられていたので、黒褐色土層面で検出することができている。



A-A´・B-B´ １住
1　保育園造成時の埋土・攪乱
2　黒色土7.5YR1.7/1　耕作土（畑）
3　黒色土5YR1.7/1　溝址埋土
　ローム粒子少　炭化物2～5mm少
4　黒色土7.5YR1.7/1
　ローム粒子少　礫2～5mm少　炭化物2～5mm少
5　黒色土10YR1.7/1
　ローム粒子少　礫2～5mm少　炭化物2mm～1cm少
6　黒色土7.5YR1.7/1
　ローム粒子多　ローム塊2mm少
7　黒褐色土10YR2/2+黒色土10YR1.7/1　71土
　ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm少　礫2～5mm少　炭化物2mm少
8　黒色土10YR1.7/1+黒褐色土10YR3/1 粘土を含む
　ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm多　礫2mm～2cm少　炭化物2mm～1cm少　焼土粒子少
　焼土塊2～7mm少
9　黒色土10YR1.7/1+黒色土7.5YR2/1　65土
　ローム粒子多　礫2～5mm少　炭化物2mm少
10　黒色土10YR1.7/1　65土　硬い
　ローム粒子多　ローム塊2mm～1.5cm多　礫2～5mm少
11　黒色土10YR1.7/1+黒褐色土10YR3/2　硬い　掘方埋土
　ローム粒子多　ローム塊2mm～1cm少　礫2～5mm少　炭化物2mm少

C-C´
1　黒色土7.5YR1.7/1
　焼土粒子少
2　黒色土5YR1.7/1
　ローム粒子少　ローム塊2mm～1cm少　礫2mm～1cm少　炭化物2～5mm多　焼土粒子少　焼土塊2mm～1cm少
3　黒色土5YR1.7/1+黒褐色土5YR2/1　混在土
　ローム粒子多　ローム塊2mm～1.5cm少　礫2mm～2cm少　炭化物2～5mm少　焼土粒子多
　焼土塊2mm～2cm多
4　黒褐色土5YR3/1+黒褐色土5YR2/1
　ローム粒子多　ローム塊2～5mm多　礫2mm少　炭化物2mm少　焼土粒子多　焼土塊2～7mm多

第10図　１号住居址（1/80、遺物は1/4）

本址の半分以上が調査区域外にあり、完掘することはできていない。それでも検出された壁から、南北の長さが５ｍ、東西の長さが４ｍ以上の方形プランの住居址であることが確認された。カマドのある壁に直交する軸方向はＳ－37°－Ｅを示す。残存する壁の高さは10～20cmである。明黄褐色土層面への掘り込みが浅めであるが、床面からの立ち上がりは明瞭であった。南壁の内側から、壁に平行する別の立ち上がりが確認されたが、これは拡張前の壁であると考えられる。この拡張前後の南壁と、西壁にかかるようにそれぞれ２箇所の柱穴が掘り込まれていた。検出面および床面からの深さは、65号土坑が46cm、66号土坑が68cm、67号土坑が65cm、68号土坑が38cm、69号と70号土坑が25cmを測る。壁下に周溝は確認されていない。床面は凹凸があるものの、ほぼ平らにつくられている。カマド付近が特に硬く、外側に向かうほど軟らかくなっていく。床面を精査したところ、西コーナーから直径70～80cmと推測される深さ20cmの71号土坑が確認された。埋土に埋め戻された様子がないため、いわゆる「床下土坑」とされるものではないと思われる。カマドは南壁のコーナーに設けられている。カマドに近い床面に遺存する板状礫とそれよりも小さな複数の礫、約10cmの厚みをもつ粘土が、カマドの構築の一部と考えられる。これらの遺存状態から、石組みの粘土カマドを、住居を廃棄する際に破壊した様子が復元される。カマドの断ち割りで天井にのせた粘土の塊が確認できなかったことからも、カマドの破壊がうかがわれる。カマドの掘方は南北約120cm、東西90cm、床面からの深さが15cmを測り、その底面が８cmの厚さで焼けている。火床から支脚を埋置するための直径約10cmの筒形の小穴が検出された。

遺物　カマドとその周囲を中心に、土師器坏・高台付坏・甕、黒色土器坏・鉢、須恵器坏、灰釉陶器碗・瓶などの遺物が出土した。この中に、天井石とみられる板状礫の下から出土したものがある。完形品は土師器坏（１）と黒色土器坏（３）の２点である。これらの土器のほか、器形復元の可能な４点を図示した（２・４～６）。他に黒曜石が５点、34.5ｇが出土した。石核１点、両極石器１点、剥片・砕片３点である。

時期　住居の構造と出土遺物からみて、10世紀後半から11世紀初頭の住居址と考えられる。

第４節　その他の時代の遺構と遺物

（１）溝址

１号溝址

遺構　調査区の北側から区域外にかかり検出された。

先に報告したとおり、本址は東西に約40ｍ離れた２つの地点で確認されている。それぞれ黒みが強く締りのない黒色土の落ち込みとして確認されたが、この土が１号住居址の埋土と酷似するため、平安時代の住居址と考えて調査を進めていた。まず西側の落ち込みを掘り下げたところ、明黄褐色土層に掘り込まれているものの、平らで硬化した面は確認されなかった。続いて東側の落ち込みを掘り下げていくと、北へ急激に落ち込むことが確認された。さらに掘り下げを進めた結果、砂利層の堆積した底面が露呈し、溝址であることが判明した。この東側の落ち込みが、浅く小さな谷に沿って西側の落ち込みへ続いていくものと考えて、２つの落ち込みを同じ溝址と判断した。東側の溝址は底面までの深さが100cmを測る。

遺物　中世土師質土器（内耳鍋）の破片を中心に、縄文土器（中期前半藤内式）、平安土師器（高台付坏・黒色土器高台付坏・甕）平安灰釉陶器（碗・瓶）、近世陶器の破片があわせて25点出土した。黒曜石は３点、4.9ｇが出土した。器種は不定形石器１点、両極石器２点である。

時期　主体となる中世土師質土器に混じって、埋土の下層から近世陶器の小破片が出土している。１点であるが、この陶器の時期を溝址の時期と考えておきたい。

第４章　発掘調査の総括

第１節　縄文時代の集落について

八ヶ岳西麓に分布する縄文時代遺跡は、例えば国特別史跡尖石遺跡のように、中期に出現し、その後半期に繁栄を迎え、終末に向かって衰退した後、消滅するものが非常に多い。また、後期前半まで継続するものもあるが、一部の遺跡に限られる。その理由として、中期の人口増加に伴い広大な裾野の食料資源が枯渇し、これに追い打ちをかけるように進行した気候の寒冷化・湿潤化によって、標高の高い八ヶ岳西麓では集落経営が維持できない状態に陥ったのではないかといわれている。

このような変遷をたどる縄文集落が多い八ヶ岳西麓の中で、断続的ではあるが前期前半から後期前半まで集落が営まれた新井下遺跡は継続性の高い集落といえる。特に台地平坦面に環状集落ないし馬蹄形集落が形成される中期後半と、台地の北側に住居がまとまってつくられる後期前半の２時期については、集落の規模・構造、住居数からみて、至近の距離に位置する中ッ原遺跡（重文土偶「仮面の女神」出土）とともに、この地域で核となる集落とみてよいであろう。

今回の調査で検出された縄文時代の住居址は、僅かに中期中葉（３号）と中期後葉（２号）の２軒である。それでも、これまで考えられていたそれぞれの時期の集落域（住居域）を東側および南側に大きく広げ、集落の構造、さらに遺跡範囲に関わる新たな知見をもたらすこととなった。こうした点において、この２軒の住居址の検出は重要であり、大きな成果といえるものである。

中期中葉の集落域については、平成５年の道路改良工事に伴う調査によって東側への拡大が指摘されていたが、この点が３号住居址の検出によって確かなものとなった。検出地点が調査区の東端部であるため、東に接する工場の下はもちろん、さらにその東側に集落の広がりを推測できる状態となってきた。詳細が不明である平成６年または７年に不時発見された国道拡幅地点の住居址はこの時期に属するものかもしれない。また平成９年に行われた工場建築に伴う工事立会の際に藤内Ｉ式の土器片が出土しているので、浅く小さな谷を隔てた北側の平坦面にこの時期の遺構が存在する可能性も考えられる。こうした点から、調査がほとんど行われていない遺跡の東側および南側に集落の中心があり、中期後半および後期前半と同様に、ある程度まとまった数の住居から構成された集落の可能性を指摘したい。

平成５年の新湖東保育園の移転新築時の調査、同年の市道改良工事に伴う調査、平成７年の北部中学校改築工事の調査によって、中期後半の集落は東西約120m、南北約100mの環状ないし馬蹄形を呈し、現在の湖東保育園から北部中学校の前庭部にかけての平坦面に広がるものと推測されている。そのため、小さな谷を南に隔てた馬の背状の高まりに位置する今回の調査範囲から、この時期の住居址は発見されないのではないかと予想された。ところが、その予想に反し中期後半の住居址が発見され、これまで考えられていた集落範囲のみならず構造をも再考する必要が生じた。それは検出された住居址を環状ないし馬蹄形集落の一部（南側）と考えるのか、あるいは小さな谷を挟んで対峙する別の集落とみるのかという点である。調査結果によれば、北側一帯に住居址や貯蔵穴といった集落を構成する主要な遺構が見つかっていない空間があり、この空間が小さな谷と重なる様子がうかがえる。こうした状況から、小さな谷という微地形が集落を形成する上で境界の役目を果たしていた可能性があるように思われる。したがって、発見された住居址は環状ないし馬蹄形集落に伴うものでないと考えておきたい。ただし、両集落は至近の位置にあるため、何らかの関係をもつ集落とみるべきであろう。尖石遺跡と与助尾根遺跡でいわれている「母村」と「分村」、あるいは茅野和

田遺跡の東西の台地にみられる時期による住みわけなどが考えられるが、それぞれの集落の広がりや消長とともに含め、今後明らかにしたい課題である。

以上に記した縄文集落に関わる新たな知見は、遺跡の範囲を見直すきっかけにもなった。それは発見された２軒の住居址が馬の背状の高まりの頂部付近に位置することから、この高まりの南側斜面に住居がつくられている可能性が考えられたためである。現在、南側斜面一帯は畑地に利用されており、表面採集が可能である。調査中に現地を踏査し、遺物の有無を確認したところ、中期後半の土器片、黒曜石製の石鏃や剥片など多数の遺物を拾うことができた。さらに新湖東保育園調査区の東側一帯の踏査によって、縄文土器と黒曜石の散布を確認している。こうした遺物の散布状態に基づき、これまでの遺跡範囲を南側および東側に拡大することとした。

遺跡範囲の拡大によって、遺跡の面積は約50,000㎡を測ることとなった。この遺跡の広さは、八ヶ岳西麓に数多く残された縄文時代遺跡の中で、最大級と言えないまでも広い部類に入る遺跡であることに間違いはない。この点が当遺跡の特徴である。さらに中期を主体とする遺跡が多い八ヶ岳西麓において、断続的であるものの前期前半から後期前半まで営まれるという長期継続型の集落遺跡である点も特徴である。発掘された面積より残されている面積の方が広いため、これまでの調査の結果、およびそれから推測される諸々の点が当遺跡の実態を示している保証はない。しかしながら、確認されている上記の特徴を考え合せるならば、八ヶ岳西麓における屈指の広がりと内容をもつ集落遺跡の一つとみてよいように思われる。

第２節　平安時代の集落について

今回の調査を含め、これまでに新井下遺跡では10世紀後半から11世紀初頭の住居址が７軒検出されている。これらの住居址は、縄文時代中期後半の環状ないし馬蹄形集落が形成された台地平坦面を中心に広い範囲に分布している。住居址の分布状況に加え、該期の遺物の散布状態、および遺跡の立地する地形を考えるならば、住居域の外側に未知の住居址が分布することはまず間違いないと思われる。さらに検出された数と同程度か倍以上の住居址の埋蔵を考えることも可能となってきた。

集落を構成する主な遺構は竪穴住居である。完存し完掘された３軒に加え、カマドと壁の一部が確認された３軒の住居址で、軸方向や規模などプランに関する情報が得られている。

この６軒の住居址はいずれも東側にカマドが設けられており、多少のずれはあるものの軸方向に共通性がうかがえる。この点については、風向きによる気象条件に起因するとの見方がある一方で、住居構造に強い規制があったとする見方がある。当遺跡の場合、台地に沿って谷間を吹き上げてくる西風に対し、快適かつ安全な住環境を指向した結果、東壁にカマドが設置されたのではないかと思われる。

住居址の規模については、３m四方ほどと推測される住居址（平成５年調査の37号住居址）が最も小さく、これよりも一回り大きなものが当遺跡の標準サイズのようである。その一方で、7.2×5.2mと推測される標準サイズの倍近い床面積をもつ大形住居址（平成５年調査の35号住居址）がある。おそらく八ヶ岳西麓（茅野市域）で調査された住居址の中で最大級と思われる。この住居址では新旧２箇所のカマドが検出され、北壁から東壁へのつくり替えが確認されている。今のところ、このような事例は本址に限られている。さらに他の住居と距離を置くかのように、台地の北端に位置する点が注目される。住居址の西側約２/３が攪乱を受けているためか、特筆される遺物は出土していないが、こうした住居址の規模および占地などからみて、集落の中で特別な立場にいた人物の住居とみてよいように思われる。

この点を示唆する他の遺構として、住居址群に近接してつくられた同時期と考えられる２基の墓坑（平成

５年調査）が注目される。１号土坑とされた墓坑では、ほぼ完形の灰釉陶器の長頸瓶とともに土師器の高台付坏・黒色土器坏などが出土している。平安時代の墓坑が集落内から発見されることが少ない上、緑釉陶器・八稜鏡・鉄鐸などの貴重な品々を伴うものがあることから、墓坑のつくられた集落はもちろん、周辺地域における有力者の墓との見方が、各地の遺跡調査の成果の中で示されている。こうした指摘を踏まえるならば、当遺跡の墓坑には少なくとも集落を束ねるような有力者が埋葬されていたと考えるべきであろう。そしてこの人物の居住施設が先に記した大形住居ではないのだろうか。

これまでに八ヶ岳西麓で20箇所余りの平安時代の遺跡が調査され、数箇所の遺跡から掘立柱建物址が発見されている。新井下遺跡でも過去に平安時代の可能性がある数棟の掘立柱建物址が確認されている(註１)。どうやらこの遺構は10軒を超える住居と少数の墓坑がつくられた集落に伴うものであることがわかってきた。その好例に新井下遺跡から３kmほど南西に位置する梨ノ木遺跡がある。この遺跡では、新井下遺跡の大形住居址と遜色ない6.1×5.9mの大きさを含む18軒の住居址（９世紀後半が７軒あり、うち６軒が台地平坦面に立地。10世紀後半および10世紀後半から11世紀前半が11軒あり、うち８軒が台地南側斜面に立地）と、台地平坦面の住居域の東外れにつくられた墓坑（９世紀後半）とともに、３棟の掘立柱建物址が発見されている。

新井下遺跡や梨ノ木遺跡は八ヶ岳西麓における中核的な集落といわれているが、このような集落の構造的な特徴をあげるならば、軸方向を揃え、重複または近接しない多くの住居と、小数の墓坑および掘立柱建物址からなる集落といえようか。なお、両遺跡では鉄鏃や鉄滓の出土が報告されており、小鍛冶遺構の共伴も加えておきたい。

八ヶ岳西麓の平安集落には、新井下遺跡や梨ノ木遺跡のような中核的な集落と、１軒から数軒の住居（「散在住居」）からなる小規模集落が存在し、前者を「母村」、後者をその「分村」とする有機的なつながりが想定されている（1994・1995）。これらの集落が、古墳時代中期以降に無人の野と化した八ヶ岳の西麓を、水田稲作のような「高度な技術を必要としない畑作による雑穀栽培を目的とした、在地領主の積極的な農地開発による私有地拡大政策」によって再開発されていったと考えられている（『茅野市史』上巻）。おそらく新井下遺跡や梨ノ木遺跡は、八ヶ岳西麓の再開発を推し進めた核となる集落であり、ここに住まった有力者の指導のもとで、「分村」的な小規模集落とともに領域内の再開発が行われたものと思われる。

こうした八ヶ岳西麓への進出は、これまで10世紀後半に始まり、11世紀前半までの約100年間であったとされていたが（『茅野市史』上巻）、調査が進展した現在では、進出した時期が９世紀の後半まで遡ることが確認されている。しかしながら、八ヶ岳南麓（山梨県北杜市とその周辺）のように11世紀前半まで継続して行われたものでなく、実態として概ね９世紀後半から10世紀初頭、10世紀後半から11世紀前半の２時期の中での出来事であったようである。つまり「進出→失敗→撤退→再進出」によって八ヶ岳西麓の再開発が進められたと考えられているのである（1997）。

このような八ヶ岳西麓の再開発史の中で、新井下遺跡はその存続時期からみて２度目の進出に伴う集落となるが、なぜ梨ノ木遺跡のように１度目の進出の際に集落が形成されなかったのだろうか。これについては、八ヶ岳南麓の平安集落の展開にみられる時期の経過とともにより高所に集落が形成されるという段階的な進出があったものと思われる（1986）。新井下遺跡は標高が1,000m近い高所にあるが、梨ノ木遺跡は当遺跡より100mほど低い900m前後の標高に位置している。また、１回目の進出期に営まれた中核的集落である可能性が指摘されている山寺遺跡も標高が915m前後であり、確かに中核的集落の垂直分布は時期が新しくなるにつれて上がる様子がうかがえる。単純に標高の低い場所から再開発が進められただけのことかもしれないが、栽培作物の種類はもちろん、農地開発以外の目的を含め、それぞれの中核的集落の進出の動機を明らか

にしていくことが求められる。

古くから、新井下遺跡から山寺遺跡にかけての一帯は、地形や馬にまつわる字名などから、延喜式にある山鹿牧（後の大塩牧）に比定されている。今のところ、これらの遺跡から牧につながる遺構・遺物は発見されていないため、考古資料から積極的に牧の存在を指摘できないのが現状である。今後、これら中核的集落の発掘調査を行う際には、牧に関連する遺構・遺物が残されていないかについて、特に注意を払う必要があろう。

このように新井下遺跡は八ヶ岳西麓の再開発の実態を明らかにできる可能性を秘めた遺跡である。遺跡の位置・立地、集落の構造のみならず、出土遺物や文献史料からのアプローチは必須である。そして、現茅野市街地周辺（諏訪湖盆）の平安時代全般をとおして営まれる高部遺跡、構井・阿弥陀堂遺跡との関係はもちろん、諏訪神社（大社）との関係についても探っていくことが必要と思われる。

（註１）　平成５年の新湖東保育園移転新築工事、および市道改良工事に伴う発掘調査であわせて３棟の掘立柱建物址が確認されている。遺物の出土がなく時期が特定されていないが、平安時代の住居址と軸方向が揃うことから、いずれも該期につくられた可能性が高いと思われる。

引用・参考文献

『諏訪史』第一巻　1924
『湖東村史 上』1961
『諏訪史蹟要項24　茅野市湖東篇』1968
『山寺遺跡』　茅野市教育委員会　1981
『茅野市史』上巻　茅野市　1986
荻原三雄「八ヶ岳南麓における平安集落の展開」『山梨考古学論集Ⅰ』　山梨県考古学協会　1986
『新井下遺跡』　茅野市教育委員会　1994
『稗田頭Ｃ遺跡』　茅野市教育委員会　1994
『新井下遺跡』　茅野市教育委員会　1995
『稗田頭Ａ遺跡』　茅野市教育委員会　1995
『新井下遺跡』　茅野市教育委員会　1996
『久保御堂遺跡』　茅野市教育委員会　1997
『梨ノ木遺跡』　茅野市教育委員会　2003

(1) 調査区現況（東から）

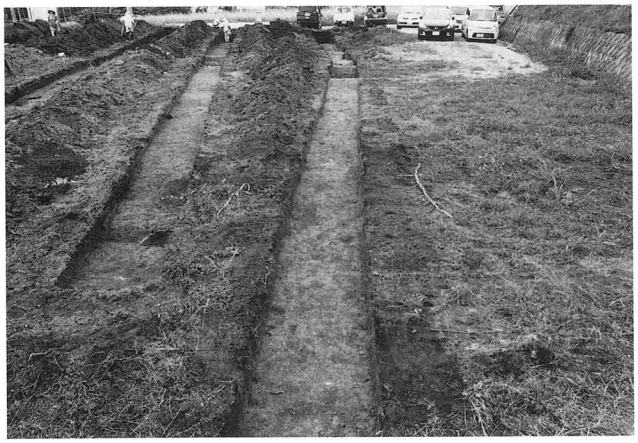
(2) ２号試掘溝東壁土層断面（北西から）

(3) ３号試掘溝北側（南西から）

(4) ４号試掘溝北側土坑検出状態（南西から）

(5) ４号試掘溝北端１号住居址検出状態（南西から）

(6) ５号試掘溝北側（南西から）



(7) ７・８号試掘溝（南西から）

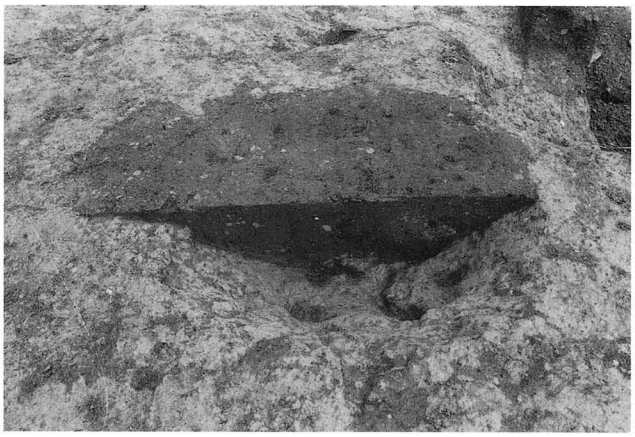
(8) 試掘調査区全景（南から）

図版２

(1) 調査区北側遺構分布状態（南から）

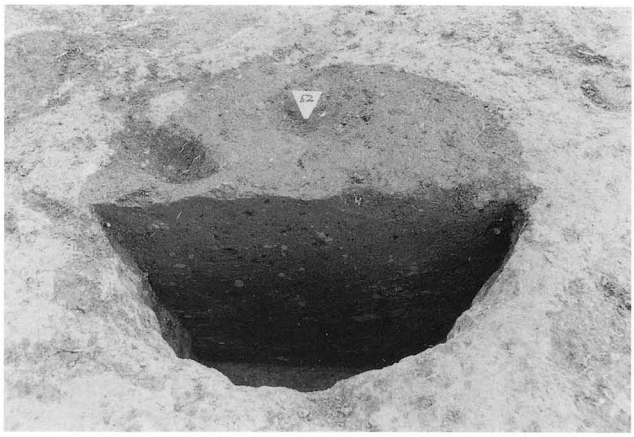
(2) 調査区南側遺構分布状態（東から）

(3) ２号住居址（北東から）

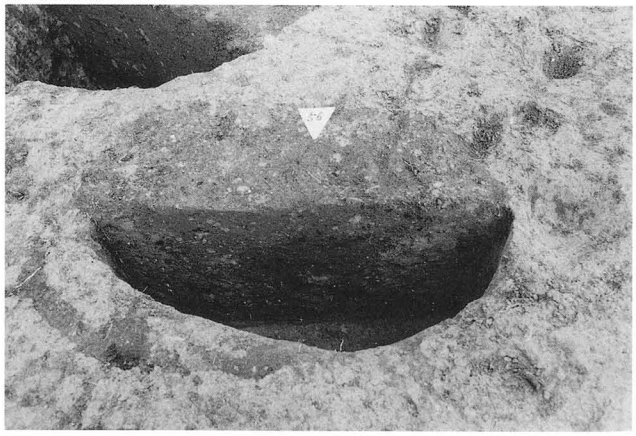


(4) ２号住居址炉址土層断面（南西から）

(5) ２号住居址炉址（南西から）



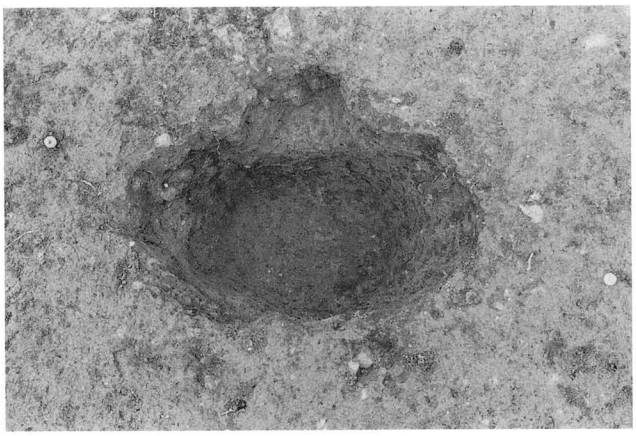
(6) ２号住居址主柱穴（52号土坑）土層断面（南西から）



(7) ２号住居址主柱穴（56号土坑）土層断面（南から）

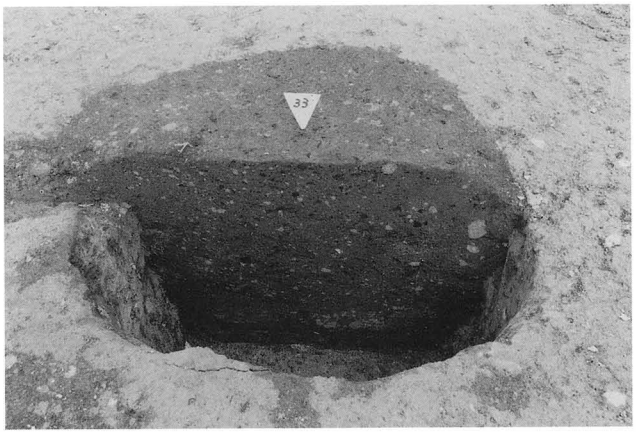
(8) ２号住居址主柱穴ほか（61～63号土坑）、焼土址土層断面（北東から）

(1) ３号住居址（南西から）

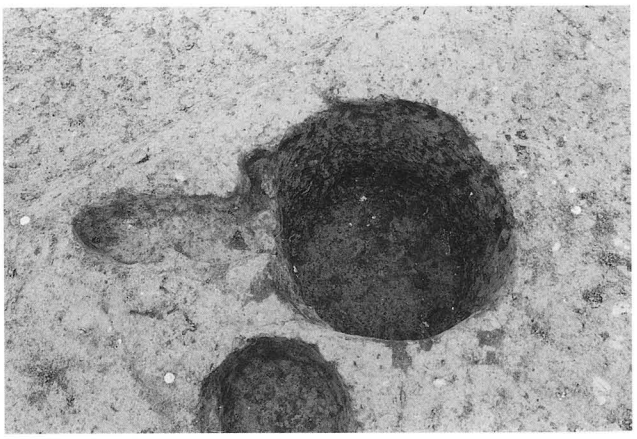


(2) ３号住居址主柱穴（25・26号土坑）（西から）

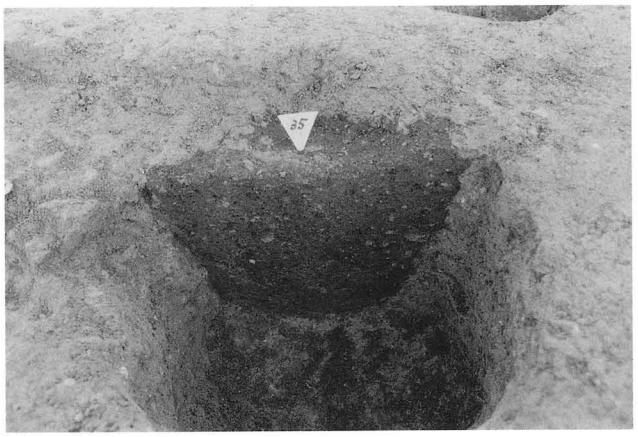
(3) ３号住居址主柱穴（30号土坑）土層断面（南西から）



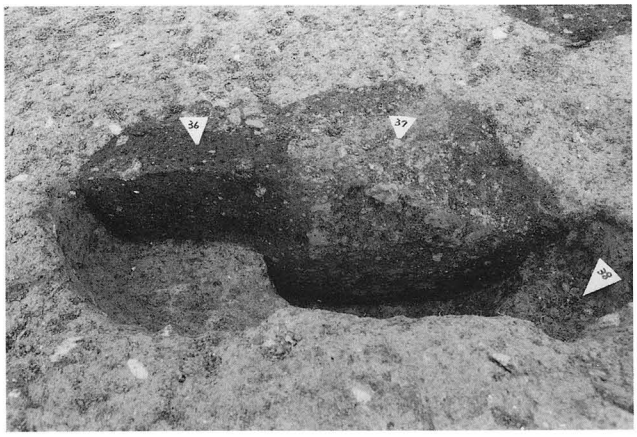
(4) ３号住居址主柱穴（33号土坑）土層断面（南から）



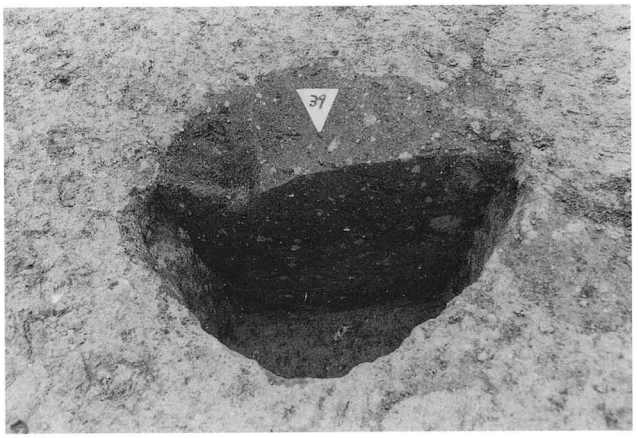
(5) ３号住居址主柱穴（33号土坑）（南から）



(6) ３号住居址主柱穴（35号土坑）土層断面（西から）



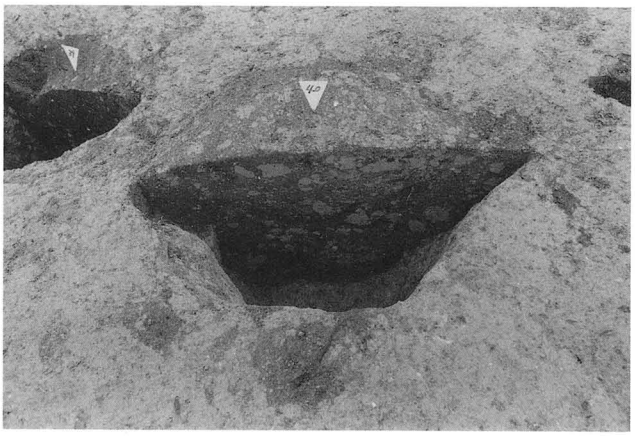
(7) ３号住居址主柱穴（36・37号土坑）土層断面（北西から）



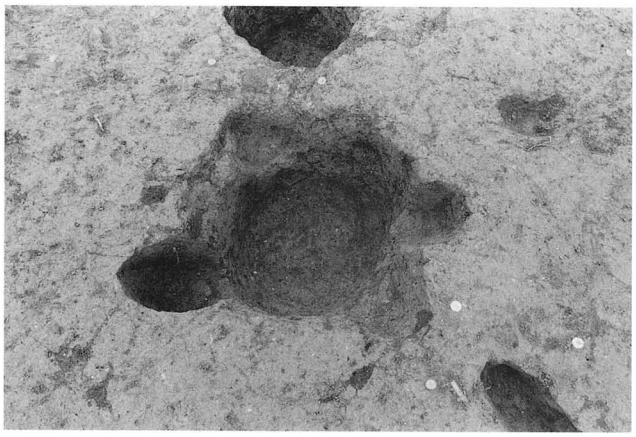
(8) ３号住居址主柱穴（39号土坑）土層断面（南東から）

図版４

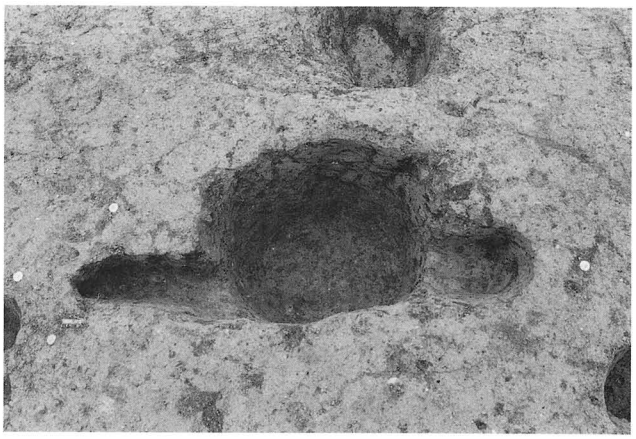
(1) ３号住居址主柱穴（40号土坑）土層断面（南から）



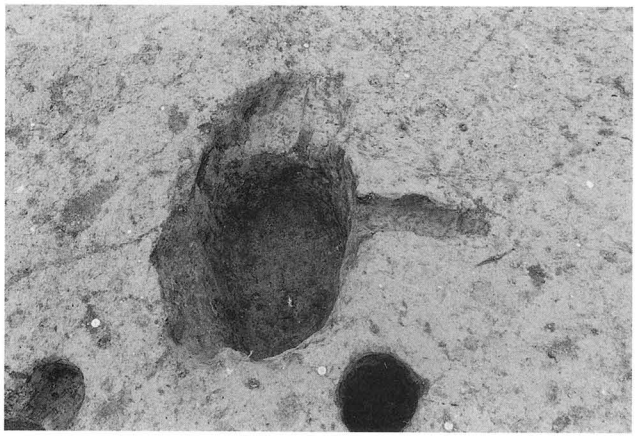
(2) ３号住居址主柱穴（40号土坑）土層断面（東から）



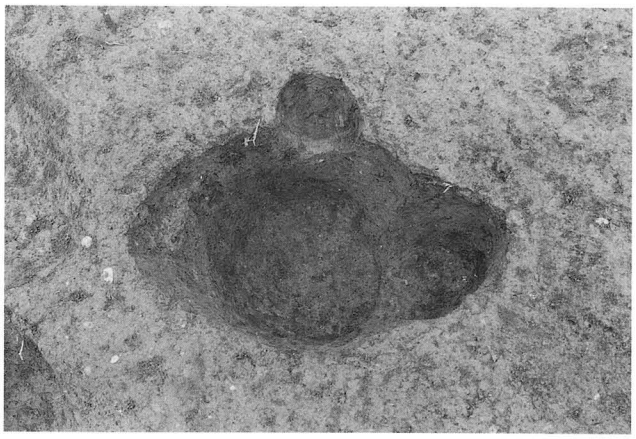
(3) ３号住居址主柱穴（40号土坑）（北東から）



(4) ３号住居址主柱穴（41・42号土坑）（東から）



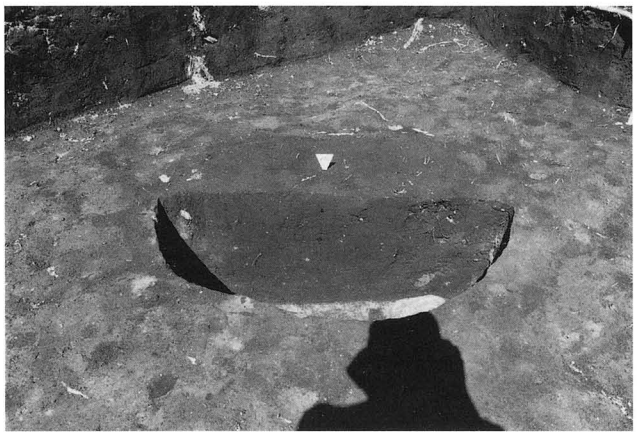
(5) ３号住居址主柱穴（44・45号土坑）（南から）



(6) ３号住居址主柱穴（47・48号土坑）（南東から）

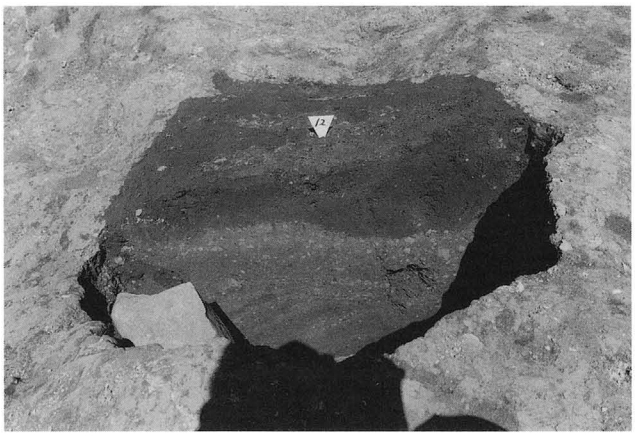
(7) １号土坑土層断面（南西から）

(8) 土坑群（西から）

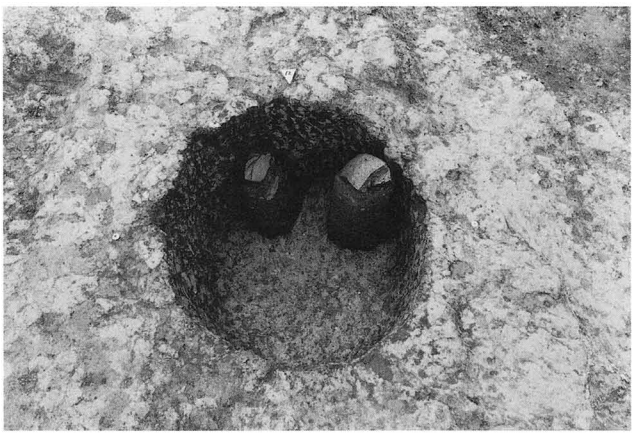


(1) 10号土坑土層断面（南から）

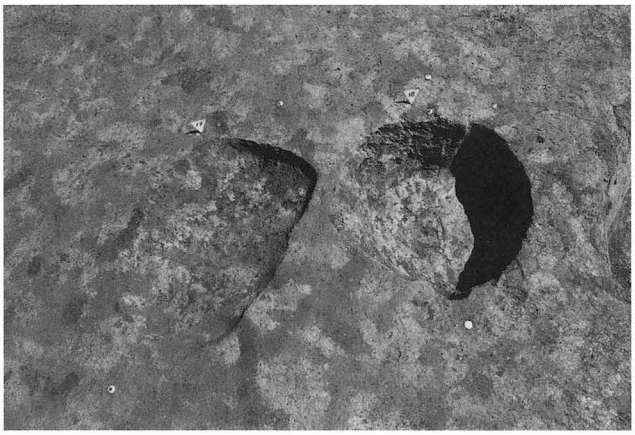
(2) 10号土坑（南から）



(3) 12号土坑土層断面（南から）



(4) 12号土坑（北から）



(5) 18・19号土坑（西から）

(6) 60号土坑土層断面（北東から）

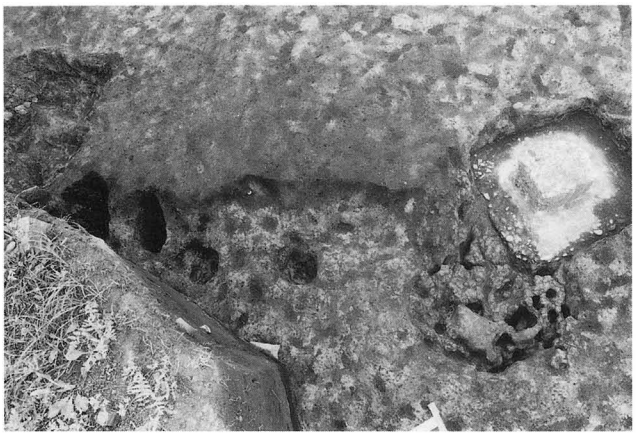
(7) １号住居址検出状態（南東から）

(8) １号住居址（南西から）

図版６

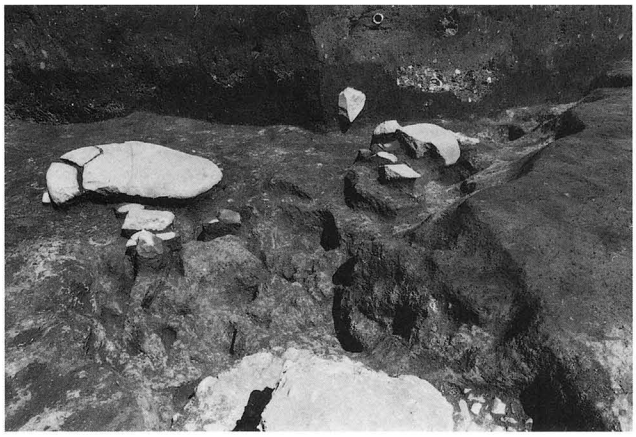
(1) １号住居址掘方（南西から）

(2) １号住居址カマド土層断面（南西から）



(3) １号住居址カマド掘方、柱穴（北西から）

(4) １号住居址遺物出土状態（北東から）



(5) １号住居址遺物出土状態（南から）

(6) １号溝址検出状態（南から）

(7) １号溝址（南西から）

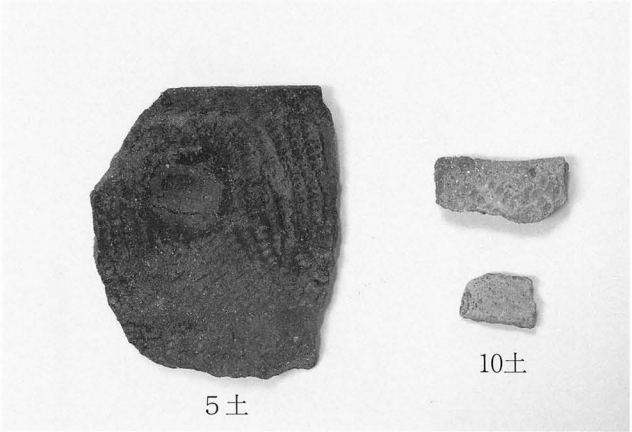
(8) １号溝址（南東から）

(1) １号溝址（北西から）

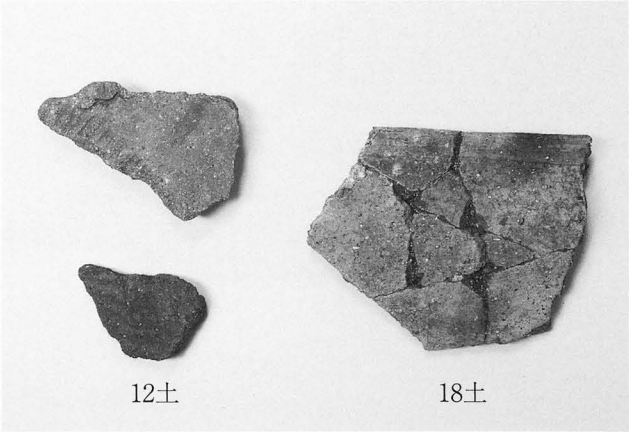
(2) 作業風景（北東から）

(3) ２号住居址出土遺物

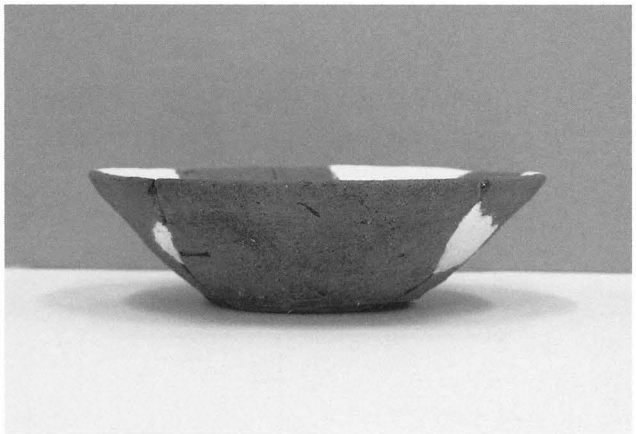
(4) ３号住居址出土遺物



(5) 土坑出土遺物 ①



(6) 土坑出土遺物 ②

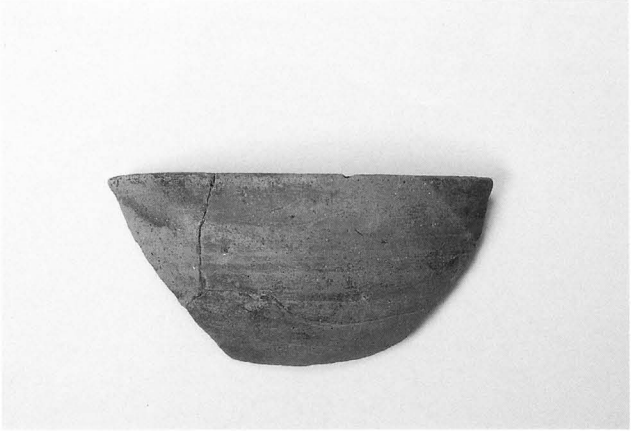


(7) １号住居址出土遺物 ①

(8) １号住居址出土遺物 ②

図版８

(1) １号住居址出土遺物 ③



(2) １号住居址出土遺物 ④

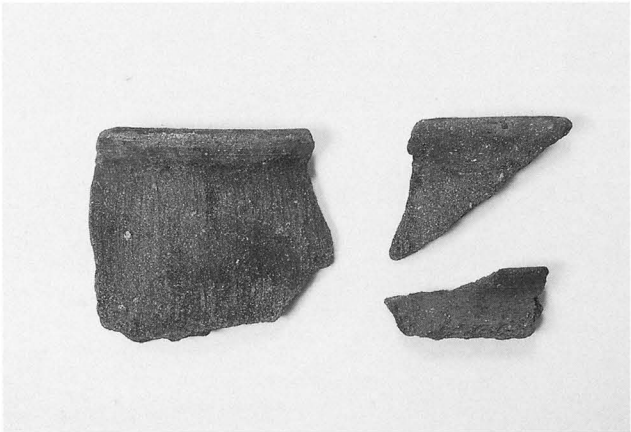
(3) １号住居址出土遺物 ⑤

(4) １号住居址出土遺物 ⑥

(5) １号住居址出土遺物 ⑦

(6) １号住居址出土遺物 ⑧

(7) １号住居址出土遺物 ⑪



(8) １号住居址出土遺物 ⑫

報告書抄録

ふ り が な	あらいしたいせき
書　　名	新井下遺跡
副　書　名	新中村配水池建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	小池岳史
編 集 機 関	茅野市教育委員会
所　在　地	〒391－8501　長野県茅野市塚原２丁目６番地１号　℡　0266－72－2101
発 行 年 月 日	西暦2013年３月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新井下（あらいした）	茅野市湖東新井（ちのしこひがしあらい）	20214	59	36度 01分 30秒	138度 12分 00秒	試掘調査 2011801 ～ 2011802 本調査 20110823 ～ 20111024	927㎡	配水池建設工事に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新井下	集落跡	縄文時代 平安時代 近　世	住居址　2 土坑　64 （住居址の柱穴含） 住居址　1 土坑　7 （住居址の柱穴） 溝址　1	縄文時代中期前半～後期前半の土器 平安時代の土師器・灰釉陶器	八ヶ岳西麓における縄文時代と平安時代の中核的な集落遺跡

新井下遺跡

――新中村配水池建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書――

平成25年３月18日　印刷
平成25年３月22日　発行

編集　茅野市教育委員会

発行　茅野市教育委員会
長野県茅野市塚原二丁目６番地１号（0266）72-2101㈹

印刷　永明社印刷所
長野県茅野市塚原二丁目12番地30号